第四百九十四號目次

◎社說
教育宗教分離の訓令
續海舟餘波(七)

◎評論
諸種の人生觀(山形東根)

◎女學
血族結婚の弊害(井上通泰)
あさかほ(左琴女)
全國高等女學校一覽表
女學と宗教
新女大學の評(山下石翁)
亭主の不平(昏軒)

◎隨感
綠陰獨囀 ○靜境亦戰ひあり ○動中の靜、靜中の動○ 佳人歎きあり ○識らざる廣き世界○聽明兼がたし○福音○奸雄○蠻勇

◎雜錄
惡魔の結婚觀(惡魔の子、有美)
いかづち物語(完結)久保ゐの吉
文書く時(靜淵)
拾ひ文(翠)
病窓に夢む四の少女(露草)

◎新刊書
審美綱領 ○日本商業史 ○西洋哲學史○當世活人畫 ○聖教新論 ○平八茶屋と北向地藏○文藝倶樂部第九篇○大日本寫眞協會品評會傑作

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

● 女學雜誌定價表 ●

前金	
壹册定價	拾錢
半年分定價	壹圓拾錢
一年分定價	貳圓
(內國無郵稅)	

代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送すべきとも可有之事
但し其節は總て一册十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料		
一行(廿七字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金
送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるる人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年八月廿四日印刷
明治三十二年八月廿五日發行
發行兼編輯人 嚴本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

「舊幕府」刊行の趣意

明治も既に廿九の星霜を重ね戊辰の少年も今や不惑の齡に達し變遷の霜寒きを感ず況んや當時幕閣の樞機に參せし人の如きは古稀の頭齡に至らざる無し今日もし舊幕府の遺聞零册を收拾することなくんば今より三四年の間には元老は皆墓に入り尋ぬるに道なく問ふに法なく恨を百載の下に抱くものあらん余も德川家の旗下に屬せしものなり轉た感慨の情に堪へず奮つて幕府特に幕末の史料纂集に從事せんと欲し木村芥舟翁に計る翁は此擧を嘉とし常に示教せられんと約す又勝伯榎本子大鳥君に計り更に又栗本鋤雲向山黃村杉浦梅潭田邊蓮舟の諸老に計りしに諸君も皆此擧を助けんと諾せられたりき唯如何にせん余が淺學微力なる十分に盡す能はざるの恐れあり希くは同感の諸君一臂の力を惜むなかれ(一册十二錢。月一回發行)

明治卅年四月　殘花　戶川安宅

舊幕府第參卷第五號目次

◎插圖
○舊幕府海陸軍將校等の圖
◎史料
○慶應四辰御役人武鑑抄 ○咬菜秘記 ○開陽丸の終始
◎史談會記事
○江川英武、田邊太一兩君
◎史論
○讀逸事史補(木村翁)
◎史傳
○安藤對馬守履歷
◎史籠
○松平春嶽侯逸事並文○海舟先生墓誌○御船之記○三老者論(奇文)○評定所○圖解○越前藩岡本氏墓碑
◎詞藻
○江府年中行事詩(山口泉處)○丸山記程○久野丹波守俳文
◎附錄
○宋名臣言行錄

發行所 東京府北豐島郡巢鴨村二百四十五番地 舊幕府雜誌社

女學雜誌

第四百九拾四號

明治三十二年八月廿五日發兌

社説

教育宗教分離の訓令

◎私立學校令は果して無味淡泊のものとなつたり。藥にもならす毒にもならず、邪魔にもならす世話も燒けず、一向、有つても無くても構ひなきほどのものとなつたは、抑そも之が發布に久しく苦勞し、右に左に擽つてもんだ爲めである。凡そ、濶大にして雄拔なる主意の法令でない以上は、先づコンナ風のものが反つて宜しいので、兎に角、差支へなく好く出來たと言つて可なるものである。

◎然るに、堂々として公然發布する法令には、表面かゝる公平を裝ほひ乍ら、別に訓令として文部大臣が各府縣知事に發したるものは、左の如くである相ナ、

一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは、學政上最も必要とす。依て、公立學校、及び、學科課程に關し法令の規定ある學校に於ては、課程外たりとも、宗教上の教育を施し、又は宗教上の儀式を行ふを禁ず。

◎コノ訓令は、如何にも心得ぬとである。第一、一般の教育とは、如何なる意味であるか。多分、一般普通の教育と云ふ意味で、普通教育の事であらふ。然るに、學科課程に關して法令の規定ある學校の中には、工業學校も、徒弟學校も、農學校も、盲唖學校の如きすらある。是等も亦た一般普通の教育の中に列すべしと云ふ乎。

◎或ひは別解釋を施こし「一般の教育」とは「總ての教育」と云ふ意味であると云ふものがある。然し、總ての教育を宗教の外に特立せしむと言はゞ、宗教の爲に建てた教育は何んとするのである乎。世に所謂ゆる宗教教育なるものは無いと認めるの乎。或ひは亦た斯る宗教々育なからしむるが、學政

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

上最とも必要であると云ふの乎。何れにしても、譯の分らぬ話しである。總ての教育をして宗教の外に特立せしむるが學政上必要だなどと言はゞ、文部省は狹量極るものである。之を特立せしめねば、文政が出來ぬと云ふの乎。又、實に特立せしめることが出來ると思ふならば、文部省の生意氣を笑わぬものはあるまい。

◎故に、吾輩が初めて此の訓令を一見した時、「扨こそ之は究策で、是も亦た何處からかもまれて出來たものだナ」と覺つた。必らずや、文部當局の經驗ある人が立案したものではあるまいと察する。其の不都合な事も、行はれぬとも、直きに分り切つて居る者を、ワザ〳〵斯ふ發令した柄である。

◎左れば、此の訓令自身が矛盾極まる不都合に出來て居るとは暫らく容赦して、假りに其の大主意とするらしき所ろを想像して見るに、

國家の自營生長に必要として自ら組織した學校、即ち其の國家教育の系統の中に屬すべき官立、公立、準公立等の普通學校に於ては、總て所在ゆる宗教の外に特立せしむるが學政上最とも必要であると認める。左りとて、政府は宗教

を妨たぐるにもあらず、信向の自由を害せんとするにもあらず、一派の宗教を偏重せんとするにもあらず、其要、只だ宗教以外に超然として特立せしめたき主意であるから、國家教育の系統に屬する官立及び之に準ずる學校に於て其宣傳を禁ずるのみである。故に、其他の學校に於て、如何なる宗教を傳へようとも、總べて自由である。又、認可學校に與へた特別の保護利益と、此の宗教的取締りとは少しも關係なきものである。其の特別認可は別に定めた資格に相當すれば（專ぱら其の設備如何による）與へるので、毫も宗教とは關係せぬ。夫故、宗教主義の學校でも、此の特別認可を受けることは出來るが、官、公立もしくは學科の規定ある學校（小學校中學校、高等女學校等を專はらに指さすの主意たり）に於ては、如何なる宗教をも等しく禁ずると云ふの精神である。左れば、此の取締を受けることを好まぬ族は自由に私立學校を建て、勝手に其所ろに於て宗教を發揚するが宜しいので、夫は毫しも文部省の關渉する所ろでない。

と、先づ斯樣に言はれたき主意であらふと察して居る。

◎成程、之は一應道理のある申分で、從來の文部省に較べて見れば、余程進歩した考へである。時勢に促がされ、必要に迫まられ、人心亦知らぬ間に一轉した故に由るでもあらふが、仲々、此丈けに開けた考を持つとでも、左程容易いとではあるまい。今の文部省を昔しの文部省に較べて、確かに夫丈けの相違はあると思ふが、時勢に對して後れて居る工合は、矢張り同然で、只だ五十歩、六十歩（百歩にあらず）の差に過ぬと言はねば成らぬ。

◎元來、普通教育の中には、是非宗教的教育を含まねば成らぬ。宗教的觀念は人の觀念の中の甚はだ高尚なもので、人生にあつて亦た必要なものであるから、是非とも之は適宜に開發せねばならぬ。適宜に開發せねば、惡性に伸びて、種々の迷信ともなり、種々の反動ともなるものであるから、是非適宜に正當に穩健に開發せねば成らぬ。夫故、普通教育の外に獨立せしめる所ろではない、普通教育の中には、是非、宗教的教育が無ければ成らぬのである。固より、宗教專門の人を造るやうな宗教教育は普通教育に於て行ふ可らざること勿論であるが、宗派に偏せず、迷信に陷いらざる樣なる宗教的開發と云ふものは是非無ければならぬ。之が無ければ、寧ろ普通教育とは言へぬほどのもので、近年、ヘルベルトを切りに有がたがつた連中などには、此の道理は直に分つて居る筈であらふ。然るに、西洋の「教學分離説」にかぶれて、教學分離が文明國の最新の説であるかの如く思ふなどは、抱腹絶倒の至りである。あれは、舊教徒の壓制傳道を止めよふと云ふ主意で、宗教的に開けた考から出て居る。コチラのは、宗教家の競爭を恐れるのか、外國人が日本の小供にドシ〳〵耶蘇教を吹込むのを恐れるのか、實は固息極まる主意から來て居る。丸で雲泥の相違である。

◎然し、斯る教育學上の議論は別として、文政取締の上から、此度の訓令を必要とするに至つたとして見るに、文部省は表面、公平の事を言ふに似て、實は私立學校を苦しめ、教育に獻身する篤志家の殊勝な熱心を妨害せんとするものである。國家の教育丈けでは、迚も不足不備であるから、私人が其の篤志により財を棄て、力を献げて之を補助しようと仕て居るもの、手を縛し、足を縛し、彼に不自由を冠ぶせて置いて、扨て之れと競爭しよふとする極めて卑しむべき處置であると

言つても差支へない結果である。ナゼと言ふに、文部省は、特別認可と、宗教の事とは丸で無關係であると言ふ相であるが、宗教家の立てた學校（例へは小中學校）は小學校とも、中學校とも爲ることが出來ぬ、隨つて、其の特別認可を受ることが出來ぬとして見れば、決して之を無關係とは言へぬ。現に、宗教家の手に屬する中學校で、從來特別認可を受て居る學校などは、此度の訓令で、其の中學校たるを止めねばならず、隨つて其の特別認可を還さねは成らぬ。之をしも、無關係だと言ふのは、表面の遁辭で、たゞ人前に公平を裝はんとする卑怯の言ひぬけである。苟くも、政府たるものが、一方に特別の保護を與へ、他に其の利益を奪つて、競爭させよふとする。喩へば、自分に兩刀を提さげ乍ら、敵を無腰にして仕合を爲さふとすると同じことで、古しへの士らひが恥辱とした所である。然るに、堂々たる政府で、而も士氣激勵を一つの主意とせねば成らぬ文部省から、左樣のケチな事を仕て見せ樣とするは、何事である乎。

◎たとひ、又少々の理屈はあらふとも、無理にこぢつけ、無益に心配して、余計な恐怖を、尤ともらしく鹿瓜らしい美言の中に包んで天下に問ふとは、國家の耻である。耶蘇教の外國宣教師が、よし五十や百の小學校中學校を開いて、夫に信者の子供を集めて教へたからとて、何を心配する價値がある乎。よしんば、其の子供が皆な西洋人風か、合の子風かに成つた所ろで、國家の大觀に於て何も心配することはあるまい、寧しろ一種の面白味がある。少々は、毛唐人風のものが、中間に混つて居るのも、國家の利益である。國家と云ふものには、色々雜多の人が無ければ成らぬ、夫で無ては、大なる開化、熾んなる進歩と云ふものは出來ぬものである。然るに、實際、憫れむべきは、此位ひの結果さへ有るまい。從來、外國人に育てられた書生は、喩へば、籠城し乍ら教へられた樣なもので、余程に親密で、余程に感化されて居らねば成らぬ筈であるのに、一向そうで無い。日本人と云ふ奴は、中々我慢があつて、妙に世界的でない所がある。寧ろ偏屈と云ふほどに守る所を遺傳して居るから、是迄でさへ、西洋人風になつたものは余り無い、況んや、此から先の事は、尚更である。左れば、斯る些細の事を心配して、苟くも、國家の政府たるものが、左樣なケチな杞憂を初めから抱くと云は、慨嘆極まると

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

である。一旦自由に放任するが宜しい、夫でいよ／＼害があれば、何時でも取締が出來る。有もせぬ幽靈に驚ろいて、初めから、ビク／＼用心する憶病の躰裁は、黄海將軍たる其人の耻辱でありませう。

◎扨て、文部省も文部省として、宗教家も亦宗教家である。文部大臣の訓令は、地方長官への内訓の如きもので、公けには無關係である。公けに發表されたる私立學校令には、毫も、宗教に關しての制裁が見へぬ。勅令第三百五十九號に、

私立學校は別段の規定ある塲合を除く外、地方長官の監督に屬す

私立學校を設立せんとするものは監督官廳の認可を受くべし

私立學校の設備授業及び其他の事項にして教育上有害なりと認めたる時は監督官廳は之か變更を命ずることを得。左の塲合に於ては監督官廳は私立學校の閉鎖を命ずることを得

一　法令の規定に違反したる時

一　安寧秩序を紊亂し又は風俗を壞亂するの虞ある時

一　六ケ月以上規定の授業を爲さゞる時

一　前項に依り監督官廳の爲せる命令に違反したる時

◎右の私立學校令に依て見ると、宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行ふを禁ずるなどの主意は一つも見へぬ。即はち、私立學校が私立學校令によつて公けに取締らるべき制裁の下には、毫しも其邊に心配すべき必要が無い。宗教家たるものに於ても、亦何を苦んで、先ぐりの杞憂を抱くか。政治は實際の手心による者で、文部大臣の訓令は、其實際の手心に關する内訓に過ない。宗教家が問はずして宜しいとである。

◎左すれば、宗教家の學校は、是迄通り依然として其の教育を變へぬが宜しいので、もし地方長官が何等かの取締あらば、夫は何の法令によつて爲さるるかを質問するより外はない。宗教家たるものは、未曾て其の宗教教育を禁じられた法令を見ないのであらふ。

◎扨てもし、彌よ、文部大臣の内訓などで、支配さるべきものとすれば、隨がつて大疑問とす可きとが多くある。宗教家は宗教家で、宗教の事に熱心すれば宜しい筈である。水のもぐる如く傳道の好方便を擴張すべき筈である。何故、公然、天下に訴たへ、其の私立學校に於て其の信徒の子に小中學校の教育を施こすとが出來ぬかの理由を質問すべきであらふ。宗教家がワザ／＼文部大臣の代りに苦勞して、學政上の便利を工夫するに及ばぬ。出來る限り、其の傳道の手段を要求するが至當である。善を爲し、道を傳ふるに、遠慮はない。之は、責任である、權利である、至當至正の要求である。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

續海舟餘波（七）

◎雜誌「日本人」に、此頃、幕末の征韓論と云ふが出て居る。幕府の末、即わち文久年間に、既に征韓論とも云ふべきものがあつて、海舟先生が、主として之に任ぜられたと云ふヿの逸話である。之は、曾て吾輩が承はつたヿもあり、又、西郷南洲先生の征韓論にも關係して居るから、玆に少こしく其の眞相と思はるゝ事實を記さん。

◎文久、元治の頃より、明治の初年に至る迄の、海舟先生の日記がある。太政官で、海舟日記と題して、寫し取つて置れたのが即はち夫であるが、曾て吾輩が之を拜見した時に、征韓論の文字が所々にあつたから、不審に感じて尋ねた。スルト、先生の答に、『對馬に、大島と云ふがあつて、木戸がひどく打込んで居た奴だが、朝鮮征伐と云ふから贊成したのサ、ナニ、馬鹿ナ、征伐どころか、貿易の爲サ。朝鮮へ行つたら、夫から又、品物を替えて支那に行くつもりだつた。歸つてから、風に吹流されてカウ／＼でしたと言へば、濟むぢやアねえか』と云ふヿで、成程、夫に違いないと思はれた。算盤を彈いてさへ、武士が廢ると思つて居た時代に於て、外國と商賣するなどと言つて、分る筈でない。是非、慷慨勇壯な議論から出なければ成らぬ。今人の言葉に、武裝的平和と云ふヿがあるが、眞とに武裝的商賣とでも言ふべきものであつたらふと感した。

◎其から、西郷先生の征韓論の事を尋ねた所ろが、海舟先生は同じ調子で『ナニが征韓論ダ、いつ迄、馬鹿を見てるのだ、あの時、己は海軍に居つたよ。もし西郷が戰かふつもりなら、何とか話しがあらふヂヤアないか。一言も打合はないよ。あとで、己が西郷に聞いてやつた。「を前さんどふする積りだつた」と言つたら、西郷メ、「あなたには分つてましよふ」と言つて、アハアハ笑つて居たよ。其に、ナンダイ、今時分まで、西郷の遺志を繼ぐなど丶、馬鹿なヿを言てる奴があるかエ。朝鮮を征伐して、西郷の志を繼ぐなど丶云ふヿが、何處にあるエ』と言ふヿで、丁度日淸戰爭の頃ろ、烈しいお話しのあつたヿがある。つく／＼と西郷先生當年の言動を考へて見ると、忽まち此の祕密が頓悟されるやうに思はれる。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

諸種の人生觀

山形東根

吾人は何の爲めに生活するか、其交際し苦難し勉學する究竟の目的、標準は何處にありや、將又斯かる目的と云ひ、標準といふものは、時々刻々變る所にして決して一定すること能はざるものにや、又此の如き問題は空漠として究むるの價値なきや否や、吾人は之に對して多少一定せる見を有し居るの要あるを信す。

人性の目的たる若し之を究めて空漠に歸せば、人生の目的は空漠にして不可思議なりと云ふも敢て不可なし然れども人生一日として何等かの目的を有せざるなし、唯萬民に通じたる觀念明白ならずと云ふのみなるべし、吾人は國民の理想信仰の淺薄なる國家は、野蠻の狀態にあるを知る、國民精神開發の度を知らんとせば、先づ其國民の多數が信ずる所の信仰、其達せんとする理想の果して何處にあるやを知らざる可らず。之を知りて其低きを解せば、之を敎育して高むる所なかるべからず。之れ決して無用の業に非るなり。說明するに先ち之を表圖すれば、左の如し

個人
- 一、利己的觀念
- 二、利他的觀念
- 三、同等的觀念
- 四、家族的觀念
- 五、社會的觀念

國家
- 一、主權擴張
- 二、仁義道德
- 三、權力平均
- 四、國家主義
- 五、列國共同主義

一○個人の部

第一、**利己主義**――利己主義とは、讀んで字の如く、己を利することを主義とす、倫理上、經濟上、處世上に於て、之を信ずるもの不尠、人は唯自巳の生存を維持すれば足るとなし、人生の目的は唯之にありとす、之則ち個人主義なり、其弊は種々あり、勞働者に對する社會政策に於ては資本家と勞働者間に相救護するの念を欠き、經濟上に於ては自由主義を排して倫理と經濟とを分離せしめ、處世上に於ては强慾非道の行動を爲すに至る、所謂厭世思想の如きも個人的觀念より

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

來るもの多し、中には宗教上、哲學上の厭世論ありて頗る聞べき者あるも、世の所謂厭世は個人主義より割出したるものなり。

第二、利他主義――利他主義の極端は普通人類の實行し得る限りに非ず、利他主義のみを以て處世せば、社會は忽ちにして仁義道德の世界となるやと云ふに決して然らず、或人は宗教上より神の意志に適ひ、神の榮を現はすことを以てするあり、然れども宗教上の信仰は各自異なる所あり、之れ心中に於て感ずる所の情なれば、同一轍に萬人に推及せんこと難し、宗教的統一は素より必要ありと雖も、異信の人に向つて、如何にして一致せしむることを得る乎、此點より見れば、利他と云ひ、狹義の宗教信仰といふは、一面の事にして、全面を掩ふて萬民に施すべきものに非るや明けし、故に生活の目的とし標準とすることを能はず。

第三、同等主義――人は自由平等にして天賦の權利を發揚し四海兄弟、同一の生活を爲し、幸福に生活するにありとするは、同等主義なり、然れども貧富貴賤の別、古より之あり、同等は到底期す可からず、不同等なるが故に競爭あり、競爭あるが故に進歩あるなり、十七世紀、十八世紀の歐洲の學者は、天然と云ひ人間と云ひ、各人生れながら權利あり獨立し平等なるべしと説き、人間は唯同等になるを以て幸福を得べしとせり。佛國革命の人權宣言書に云く、「社會の目的は一般の福祉に在り、政府を設立するは人をして其の自然的固有の權利を自由に使用することを全うせしめんが爲なり」と。而かも自然的固有の權利なるものは、名ありて未だ實なき者なり

第四、家族主義――或人は唯家族の安全を計り之を幸福の位地に進むれば足れり、之れ人生の最高目的なりとす。然らば家族を安全にせば事足るやと云ふに然らず、家族外に社會國家あり、社會と國家は之を如何にすべき

第五、社會的共同主義――斯に於て乎、社會的なる個人の共同主義なるもの起る、之を名けて社會學的人生觀となす。アリストテレス曰く

人は天性政治的動物なり、是れ偶然に非ず、天性によりて國家の外にある者は、人間以上なるか或は其以下に居る者なり、……孤立したる個人は自己を滿足せしむるに足らず、故に彼れは全躰に關係を有する部分の如し、然れば社會に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生活する能はさる者、若しくは自ら足れりとして之を要せさる者は禽獸なるか或は神なり

蓋し個人と社會とは其關係密切にして人類は社會にありて、始めて人間となる、社會を離るゝ時は人にして人に非るなり、而して社會中の社會なる國家に在つて始めて人たるを得、人の品格、人の目的は唯國家に屬して維持し得となすなり、

然れば、人生生活の標準は何れにありや、曰く國家に屬して其心身の發達を完全にするにあり、社會と同一躰となり、社會の心を以て心とし、相互に利益を計るにあり、此故に、全人類を總括して爰に全人類團躰の精神に結合し、吾人はそが部分として行爲するは最上なり、國家を組織し國家の精神に結合し、國民として國家の爲めに行動するを其次とす、一種族、一社會に於てするは其次たり、一家族と一私人と降りて品性益々下卑となるなり、

然りと雖も、個人の目的は國家の盛大にありと云ふは非なり、之れ唯吾人の標準として掲くべき事のみ、個々人々境遇により教育により階級によりて日々其目的とする所を異にす、各自相應の目的存するなり、此間に萬民に通じて誤らさるものを撰出せば、蓋し欲望の滿足は萬民の心身發達にありと云ふへし、夫々の望慾を遂け完全に心身を發達せんとする之れ人生の目的なり、而して其標準は個人なる自己より他人に及び、家族に及び國家に及ぶに於て高低の度あるのみ、吾人の生活標準は飽迄も高尚にせさるへからす、則ち相互に助け相互に進歩せさるへからす、此見を指して余は社會學的人生觀となすなり、

民族が這般の理想、見地、標準を高く掲けて、各自行爲の規則とするに至るは、最も進歩せるものなり、而して其國民生活の標準の高低は、第一に公共事業の發達如何、第二に公民の如何によりて解し得へし、此二者は、民族精神の發達を見る全躰に非すと雖も、而かも最も注意すべき要部たるは言を俟たず。

二。國家の部

國家の目的、列國々際の標準何處にある乎、之を究めて各國の爲す所を見れは、又其民族精神の發達を計るに足る、

第一、主權擴張――封建時代の國際公法は、主權擴張を基本

とせり、一國は唯力の限り他國に對して主權を伸張する權なりとせり、之れ今日の立憲主義に反す。之を個人に譬ふれは利己主義の如し、攘夷精神の發する時、此説多し。

第二、仁義道德――列國兄弟の如く相親睦し、宗教の教旨に從ふとなす、之れ國際事實と反す、斯の如き國際未た曾て之れなし、之れ理想とすへしと雖も、實行すべからす、尚ほ極端の利他主義の行はれさるか如し、

第三、權力平均――列國の間に權力の平均を得せしめんとするもの之れ權力平均主義なり、而かも此主義は現在のまゝには適當たるも新たなる權力を得んとする國家の爲に不利なり、且つ國際關係は常住一定に非す、不平均あるは常なから平等を欲するは空想に外ならさるなり。

第四、國家主義――同一國民をして同一國家を形成せしめ他の國民に對して獨立し其運命を完うせしむるを以て要義となすなり、然れども英國は、エンクランド、エルス、アイリッシ、スタッチとなる成り、墺國はゼルマン、ハンガリアン、ボヒミヤン、ムシアル等の數種より成る、如何ぞ國際の要義之に在りと云ふとを得へき、自國のみの種族的團結を欲するにて恰も個人の家族のみを目的とするに相似たり、

第五、列國共同主義――外國と交際するも國家の一事業なり、國家の目的は公民の發達にあれは外交も此目的より出づ、一人にして足らず一家にして足らざる所は他人、他家則ち各社會より補助せらるゝ如く、國際によりて、自國の欠くる所を他に求め、以て自國の進步と公民の進步を計るなり、故に他の人民の正當なる意思を貫かんとするを助けざるべからず、自然互に相依賴するの度は文明教化の進むに伴ひて增加するものとす、貿易商業の行はるゝ列國互に交際ずる則ち此理より來る、之れ則ち列國共和なり、之れを社會學的國際觀となす、

三〇　結言

個人生活の標準は自己の生存をのみ貫く爲めに非ず、宗教の教ゆる所を唯一の金則として守る爲めにあらず、人民互に自由平等となる爲めにあらず、社會の有機躰に屬する一人として自己の慾望を滿足せしめ、義務を行ひ、人を補助し人に補助せられ、互に欠くる所を補ふて、心身の發達を計る之れな

り。故に吾人は他の社會を害せざるの義務あり。即ち悪を爲すの權利なし、而かも社會によりて自己の發達を計るの權利あり、之れ人生の根本的觀念なり。國際も亦斯の如く、唯自國の主權を貫き、宗教の教旨に適ふを力め權力の平衡を保ち、又は國民一統のと等の爲に非ず、實に立憲國家の目的たる公民の生活發達を完全にするにあり。個人にして個人心身の生活發達は完全にせば之れ其目的を遂げたるなり、國家亦公民の生活發達を充分にせば、其目的を遂げたるなり、之れ國際の根本的觀念なり、而して右の如き思想行爲の深淺は個人及び國民の精神發達を計るの一標準となすに足るものなり。

○志士を苦むるは猶ほ植木に肥しを與ふるが如し。苦しむるほど、益々其の志を堅くせしむる耳（西郷南洲）

○既に一旦　陛下の御車を武藏野々頭に引出したる以上はたとひ糞汁を冠ぶるとも一新の大業を成遂げねばならぬ（大久保甲東）

○薩長の芋掘等に何が出來る乎、引くるんで遂に此方に利用し様と云ふには、五十年は掛る筈だ（勝海舟）

女學

血族結婚の弊害

井上通泰述

血族結婚とは血のかゝれる親族相互の結婚を云ふ古き獨逸の詩に云ふ「ハイラーテン、インス、ブルート」「ツート、ゼルテン、グート」「ステルベン、フエルデルベン」「オーデル、カイチ、エルベン」之を譯せば血族結婚はよい事が少い、子が生れぬか生れても病氣になるか又は死ぬと云ふ意なり。此小詩よく血族結婚の弊害を云ひ盡して餘あり。血族結婚の弊害中最著明なるは聾啞と色素性網膜炎となり。聾啞については耳科醫金杉英五郎氏が調査せし聾啞四百三十人中八十五人（即百人中殆二十人の比例）は血族夫婦の出なりきと云ふ。

余は今血族結婚と色素性網膜炎との關係を述んと欲す。まづ色素性網膜炎とは一種の眼病なり。今や眼科學進歩して眼病の大多數はその初期に於て良醫の治療を受けなば必全治すべし。然るになほ二三、いかに患者が攝生を重んずともいかに

醫が治療を盡すともつひに失明を免るゝことを得ざる難症あり。色素性網膜炎は即其一なり（因に云ふ單に網膜炎と云ふは單純性網膜炎なり。色素性網膜炎とは風馬牛なり。）世上の網膜炎に罹れる人此講演を傳聞して徒に杞人の憂をおこすなかれ。而して色素性網膜炎と血族結婚と膠漆の關係あるは上に述べしが如し。

左にその關係を詳説せんか。去りし明治二十八年七月余が當地に來任せしより一昨三十年の終迄二年半の間に岡山縣病院にて診察せし色素性網膜炎患者二十四人。其中にて父母相互の關係記錄に見えたるもの十七人。更にその中にて父母互に血族なるもの實に十人なり。遠西諸家も亦云ふ本病患者の四分一乃至三分一は血族夫婦の所產なりと

人或は云はん。假に本病患者の三分一を血族夫婦所產とすとも未だ本病が血族結婚に關係あることを證明するに足らず。若世上一切の夫婦の三分一が血族結婚ならんか世上一切の本病　患者の三分一が血族夫婦の所產に係らんこともとより怪むべきにあらずと。然り若世上血族夫婦の數如是に多からんか、血族夫婦の子と非血族夫婦の子と本病を起すに於て相擇ぶ所なしと云ひつべし。然るに顧みて遠西諸國の統計を見るに夫婦百組中その互に血族なるもの少きは一組に足らず多きも三四組に越えず。若本病と血族結婚と相干渉する所なくんば本病患者百人中血族夫婦の所產に係るものまさに一人乃至三四人なるべきなり。

或は又云はん。余が耳の聞く所目の見る所血族夫婦にして佳兒を生みし例少からず。誰甲は子女に富めり。誰乙の兒は耳目聰明なりと。然り歷史も亦此事實を證明せり。たとへば上代の聖人と聞えたる聖德太子の父用明天皇と母間人穴太部王とは父方より云はゞ異母兄弟、（因に云ふ上古は異母兄弟の結婚については社會の制裁なし。今の眼を以て御二柱の上を怪むなかれ）母方より云はゞ從兄弟なり。されど此事實を以て學者の說を駁せんとするはなほ何がしは平生不養生であるけれども强健である衛生の道豈講ずるに足らむやと云ふの愚說に齊し。强ひて辯ずるに足らざるなり。

さて上に述べし血族夫婦の關係を調査するにその中九組は四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

等親即いとこにして一組は五等親即いとこ半なり。聞く新民法には三等親即をばをひ、又はをぢめひの結婚を禁じて四等親即いとこ相互の結婚を禁ぜずと。余は眼科醫として新民法立法者の意を怪まざるを得ず。夫三等親結婚は社會の制裁あり。(上述の十例中に三等親夫婦の所産なきを見ても此種の結婚少きを察すべし)必しも法律の禁を須たず。若夫四等親結婚は社會の最も好む所にして(いとこ夫婦は鴨の味の諺譬とするに足る)しかも法律之を禁ぜず。その弊害の及ぶ所測る能はず。余は世人に勸む、たとひ法律は禁ぜずとも世人はつとめて此種の結婚を避くべしと。

上述の如く血族結婚が或は精神的に或は身躰的に往々累を子孫に貽すことは既に學者間に知られたる事實なり。しかもなほ世上にしばしば血族結婚の例を見るは一には世人の無智に坐すべしと雖も一には重婚は親を厚くすと云ふ考へか又は鍾愛の女を他人の中に投ずるを悲むの情より出づるならん。試に思へ重婚親を厚くすとも子孫絶滅せば何かせん。鍾愛の女をして不具なる兒を生ましむるの悲は之を他人の中に投ずるの悲にいづれぞ。苟事理を解するの人は躊躇する所なかるべきなり。終に臨みて余が實驗せし一二悲慘の例を語らむ。一男子色素性網膜炎に罹れるが上にいとこなる婦人を娶りて一女子を生みき。妙齢二八。瞻視人に異なり、相携へて余が診を求む。之を診するに又色素性網膜炎なり。嗚呼世人の事を解せざる卵上卵を累ねてその危きを知らず。憫むべきかな。又某氏にいとこ夫婦あり數子を生みしに皆育せず、僅に一兒を殘せり。その子白痴にして盲なり。

余は更に一變例を語らむ。某氏の夫婦互にいとこなり。綢繆數年。瑟琴を鼓する如し。隣人皆羨めり。一日夫血族結婚の弊害を聞き涙を揮ひてその婦を逐ふ。夫血族結婚に弊害ありとも必しも不祥の兒を生むものにあらず。若血族結婚の弊害を聞くに與らば應來兒女の結婚を愼みて可なり。いかでか既往に溯りて千日の恩愛を棄つべけん。余は詩人なり。涙に富めり。學理の槌を揮つて菱花を碎破せんことを勸むるものにあらざるなり。

あさがほ

播州屋形村　左　李　女

露もおひつかへす〳〵も思ひ出て

ひとりぞ見つる朝顔の花

その圓位上人の歌を聞そめてより、我の朝顔を愛るといよ〳〵切になりぬ。されば今年も、裏とも云はず表とも云はず、空地ある所は朝顔にあらざる所なき迄に植渡したり。然ど培養法なぞは一向に心得たるにあらず、唯干きたりと見れば水うち、餘に根繁しと思へば根わけするのみ。されど其内にて、裏に一ヶ所、表に一ヶ所は、只管見事ならんとを心に祈りたれば自然と世話や行届きけん外々の分より蔓もふとく、葉も大きくて、何となく頼母敷げに見えたる所、果して玆二ヶ所は先鞭つけぬ。此頃の朝より紫、白、紅、なぞとり〳〵咲出て、彼の露も置つと詠められける。さて外々も少々の遅速はあれど、さまで見劣なく出來たるに、唯裡庭の板垣にそへて植たる分のみぞ、心盡しの極みなれ。此分最初の考には、蔓長く延してそのまゝ板垣によらしめず、餘の上に花を見んの心算なりしに蔓板垣に少々登り初し頃には必ず夕立雨降りて夫にうたれ地上に落ると度々なりしが、いつしか蔓に面白からぬくせ付て、葉さへ枯々になりゆき、餘りに哀に覺えしかば、終に最初の考案を捨てゝ、けふしも、更に小柴垣結びやりぬ。されば今より元氣を恢復して、遅れながらも色咲ぬべきか。猶覺束なき心地すれば、いつそ根ぐるめ引捨ん乎。」咲てだに槿花一朝、敢果なきとの極みなるを此敢果なきを盛りにだに得會さず、引捨るは我心の忍びざる所、いかにせんかくせんかと、小柴垣に片手をかけて、つく〳〵仕案すれば、又更に悲しき事こそ思ひ浮びつれ。」我次男の誕生四ヶ月まへにさそひくるゝ人ありて、都の花見んと登りつ、上野、墨田とあくがれて、藤も待、牡丹も詠め、猶兩見無事との消息に安堵して、終に蓮の花咲く頃迄とゝまれり。其頃大路の暑さに堪へかねて、國へは歸りぬ。」長男は其頃四歳なりし故、百日ばかりにさまでの相違もなからめど、次男はふとり最中ゆへ、定めし大きく愛らしくなりつらんと、親心とて秘に樂しみ歸へり見たるに、圖ざりき、彼は百日以前の彼よりは猶且少さくなりし程衰弱して、久々に逢たる我に笑ひ顔も見せす、唯物憂げに乳母の膝にもたれ居たり。豫想外なる有樣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に我は、驚き、乳母に向ひて、何か急に發病せしかと尋ねたれど、どことて悪き所なけれども、暑さにて弱りゐらるゝならんと、語りたり。さてはさうかと時の手當など指圖して、兩三日を過しつゝ、つく〴〵容躰を見るに、暑あたりとはいたく變り、只管有形食物を乞ひ求むるさま、未だ消食器のととのひ居らぬ彼の如きには甚だ不審しと、試にとりて與ゆれば、欣々然としてこれを甞るさまいかにも、空腹らしければ、もしやと、乳母をよびて、二便の量など尋ね見るに、普通の幼兒の半分の量にも足らざりき。さては小兒の衰弱するも道理よ、全く乳母の乳いつの程よりか、小出になりゐるなり。けり。此乳母至て年少者なりし故、自身の乳の小出になりしにも心付ず、只管暑當とのみ、心得ゐたるものならん。因りて早速第二の乳母を雇いれ、是につかしめたるに、暫時にして通常に復したれどいかにせん最も大切の哺乳期に充分の哺乳をなさゞりしかば爾來滿二ケ年を經たる今日も、猶顏色蒼白く、頭髮薄く、實に見めいたましき軟質とはなりぬ。嗚呼此軟質を造りたるこそ、我生涯の失なれ。母てふ名義に重大の責任を持ながら、注意に注意を要すべき愛兒の哺乳期も顧す、尤經驗なき年少乳母に、三月に餘て打任せおきたる我無慈悲、我無責任の罪は、永く我胸中の憂苦となりて、絶ゆる時なし。あゝ諸々の罪は慚愧によりて消ゆると聞く。されど、我此罪科此憂苦は、いつの時かは消滅すべき。幸に兒の身躰舊に復して、恙なく成人し、人なみ〳〵の智識も得るとのあらば、初めて罪の消ゆるなるべし。嗚呼其事の二十年、三十年と遠き未來を想へば、胸中更に懊惱を增す。素より人と植物と性も變り責も違ども今この出來榮えなき小柴垣の朝顏を見て、心中小止なき煩悶を聯想し、かぎりなき恨とはなりけり。强いて氣をかへ歩をうつして、彼のよく出來たる二ヶ所へ來り、あす咲く花のつぼみを數へをれば、「母さん頂戴よ」の聲うしろに聞へぬ。

女學子曰く、朝顏を誰が敢果なきものと言そめけん、人をこそ花は若か言んとすらん。茲に左琴女、一朝の花に觀じて、一子の全生を懷ふ。母としての慈心愛膓、轉たゝ同感の念に禁ぜず。たゝ祝す、槿花に明朝なくして人の子に來年はあり。速に滋なひを加えて玉躰を大きやかにし、亦靈心を養なわせて、非身本躰の寳を健全にし玉はんとを。

全國高等女學校一覽表（明治三十二年五月十二日東京に於て調製）

（教育公報六月十四日）

	本科生徒數	補習科生徒數	專修科生徒數	内寄宿舍生徒數	職員數	經費總數	内補助金額	内職員俸給額	内學校醫報酬	授業料額	性質（府縣市町私立）	創立年度
山形	二〇五	〇	〇	〇	一一		一五〇〇	三、三五〇	一二、〇	三〇錢	市立	三十一年
鶴岡	一六〇	一八	五〇	〇	一四	四、二三三	一五〇〇	二、九四〇	一〇、〇	三〇 二〇	町立	三十年
長野	一六〇	三〇	八〇	〇	一二	四、三〇二	〇	三、六三六	三六〇	七〇 五〇	市立	二十九年
名古屋	二二〇	〇	三〇	〇	一九	五、四六九	〇	三、九〇〇	一二〇	本科一〇〇 專修科五〇〇錢	市立	二十九年
奈良	二〇七	一六	九一	一三〇	一九	八、二四七	｜	四、五四八	三五円	管內七五 管外一〇〇	縣立	二十九年
仙臺	二五〇	〇	〇	〇	一四	四、四五〇円	一、〇〇〇円	三、二八六円	六〇円	八〇錢	市立	三十年
酒田	二五〇	｜	二〇	｜	一三	四、六三五	一、四〇〇	三五七六	一〇	三〇錢	町立	三十一年
鳥取	二五〇	二三	一三〇	〇	一八	二、三〇〇 概算	三、六〇〇	不詳	一〇、	本五〇〇 專三〇〇	市立	三十年
米澤	二三〇	｜	｜	｜	一〇	四、一〇〇	一、四〇〇	二、五〇八	｜	三〇〇	市立	三十一年
松江	一四八	一八	四	一一	一二	二、六九〇	一、〇〇〇	二、一七六	四〇、	三十錢以上 四十錢以下	市立	三十年
彦根	一三九	九	五〇	｜	一二	四、六〇〇	二、〇〇〇	二、六四〇	五〇、	五十錢以上 六十錢以下	町立	二十八年
和歌山	一一五	｜	｜	｜	六	一、五〇〇	｜	一、一九七	｜	三〇 四〇	市立	二十四年
東京	三七〇	二九	〇	〇	一七	七三九九、八八〇	｜	五四〇〇	六〇〇〇	本科五錢 補二〇〇	府立	廿一年
金澤	二一七	〇	〇	〇	一三 外兼一二	三、三六八	一、二〇〇	六、八九二 兼務無給	市立小學校ヨリ兼務手當	五〇錢	市立	三十一年
栃木	二二〇	一一	四三	七〇	本務一二 兼務四	五、九七三円	｜	本務三、二九〇円 兼手當二四〇円	八〇円 年	本科八錢 專修科三〇錢	縣立	女子中學創立明治八年
群馬	七五	｜	｜	一六	本務五 兼務二	四、九〇六円	｜	二、一〇〇	二〇円 年	七〇錢	縣立	二十二年
靜岡	二二五	一五	二〇	二〇	本務八 兼務九	四、三〇〇	八、〇〇〇	二、五八〇	｜	一五錢	私立	二十六年
高知	二八八	二〇	〇	〇	一四	四、六〇〇	〇	三、二〇〇	三〇円 年	六〇錢	縣立	二十年

女學と宗教

◎「女には宗教が宜しい」と云ふ一語は、多年見識ぶつた先生から屢ば聞いたことである。吾輩から言へば、ソンナ生意氣な事を言ひたるが先生にこそ第一宗教が入り用だと思ふのであるが、然し、女には眞とに宗教を欠いてはならぬ、女にして宗教を欠く時は、其の美と、其用とを、過半失なつて仕舞ふ樣に思ふことは、吾輩も同論である。

◎人間は悉な左樣であるが、就中、女には、確乎として信ずる所のものが、無ければ、極めて危ない。第一、其の凝り性を寄せる所ろが無いから、反動して忌ましい散漫性となる。女は、其の守る所を獲れば、極めて堅固であるが、もし守る所を失ない、偶として懷疑に傾むく時は、其の害、男子に於て見るよりも更に太甚しいものとなる。女には、是非とも、戴だく所、崇める所、生命として信ずる所のものが一ッなければならぬ。

◎日本では、從來、武士道が一種の宗教となつて、君侯の爲め、家名の爲め身を獻げる覺悟は、宛がら宗教的獻身の如きものであつた。随がつて、女が其の良人の爲に身を棄てる心得も亦た一種の宗教的道義となつて、驚ろくべき威力のあつたものだ。良人を稱するに、所天の二字を用い、丁度、男子が君侯と家名とに仕へると同格の忠實をもつて、其の良人に仕へたものである。

◎然るに、世態一新し、道德、姿を變え、昔し絶對的に威力ありしものが自づから威嚴を失ない、世は所云ゆる移り行の時代となりしゆへ、男の道、女の道、同もに其の據り所を一變することなつた。即わち、人心、懷疑に陷いり易き時節である。無制裁、亂暴、放埒、などの惡德に陷いり易き時節である。即はち是れ、尤とも宗教の信仰を入用すべき時節である。

◎宗教と言へば、只だ單純に宗教たるのみに過ぬ樣であるが、其の觀念に伴なつて生ずる種々の感情がある。第一、崇め敬まつて、威嚴あるものに畏れ尊とむの感情。其の崇敬寅畏するものに對して、身を獻げ己を棄てんとするの感情。有形目前の俗務に惑溺せず、遠く懼れ、近く愼しみて、永久の至樂に理想を托するの感情。宇宙人世の美を味はひ、自然界の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

樂しみを欣こび、非情無心の天地に對して、親和交通の誼みを結びて、默想獨吟に言ひがたき愉快を覺ゆるの感情などは、皆な宗敎の信仰に伴なつて生ずる結果である。此等は實に人の感情の中の殊勝なるものにして、就中、女子の特性の中に第一位を占めべき美質である。

◎左れば、敎育の中に宗敎を欠くは、樹木の養ひに花を落すの類で、殺風景極まるものであるが、中にも、女學の中には是非、宗敎の敎育を欠いてはならぬものである。宗敎的越味を加へぬ女學は、造りつけの人形を造るやうなもので、生氣もなく、味ひもなく、如何なる美人でも、其顏に一種の風釆を放たしむるヿが出來ぬ。其心に、確乎たる守る所を得させるヿが出來ぬ。濃やかなる女の情に合せて、殊勝なる尊敬謹愼のたしなみを得させるヿが出來ぬ。

◎否な、此迄の日本の女子敎育には夫が出來たでは無い乎と云ふ人もあらふが、即わち夫が宗敎に似たる一種の感化力ある女學であつたゆへ出來たので、今の如き移り行時代には夫すら出來ぬ。今の宗敎なき女學に於ては、昔しの女敎にあつたる如き「威嚴ある中心」となるものが無い。斯る中心なく、據り處なき女學の結果は、女子をして往々散漫、懷疑、放埒、不貞操たらしむるものである。

◎女學に宗敎の必要を覺るに付ても、宗敎と宗派との別を明らかに知らねば成らぬ。世上に屢ば聞く宗敎に對しての反對論は、槪むね宗派上の弊害に對しての攻擊で、宗敎其ものの本色に對しての異論では無い。凡そ何物にも弊害の無いものは無い。藥になるほどのものは、偶として毒にもなる筈である。宗派の末流の弊害を擧て、直ちに宗敎其ものを丸で沒しては成らぬヿである。

◎然し、宗敎なるものゝ世に存する形は、何れ、何か一つの宗派となつて居るのである。自分では、宗派の積りでなく、正敎とか、眞宗とか云ふ名をつけて、之が本當の宗敎だと言ふでもあらふが、つまり外から見れば矢張り宗派である。夫ゆへ、適切に申さば、宗派を離れての宗敎は無いと言つても亦可なるほどの有樣である。

◎左れども、亦自から其の別のあるもので、宗派に偏より易きと、否らざるとの相違がある。大きな宗派を言へば、基督敎、佛敎、マホメツト敎も皆な宗派である。夫で、可成く、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

宗派心に拘泥せぬやうにして、宗教の本色たる大切の所を心に得る樣にすれば、弊害少なく、功德多き信仰を得るヿが出來るのである。

◎殊には、教育に合せて教ゆべき宗教、即わち學校內に於て教ゆる宗教は、就中、宗派心を起させぬやうにして、專ら宗教の精神たり、本色たる所を自得させる樣にせねば成らぬ。其の宗教の傳道に伴なひて生じたる歷史上の仕來り、無益にして矯激なる宗規、宗法の如きものは、一切不問に置ねば成らぬ。他日、家を預かつて、一家の平和の主婦と爲るべき者に、愚にもつかぬ宗教的迷信に凝り固まらせて、無益に平和を破らさせる樣なヿがあつては成らぬ。之を傳道師にするのでは無い、之を尼にするのでもない「完全なる教育を與ふるに付ては、宗教的觀念を開發するヿも亦た一大要件なりとの考からして、宗教を教ゆるのである」と覺悟せねば成らぬ。

◎會堂寺院は、月一回、七日一回位ひ、信者を集めて感化する所ゆへ、十分に話して、赤裸々に說法せねば成らぬのでもあらふが、學校は、年中日々、近く相接して、感應感化を交ゆる所である。口に言つて初めて感服させるやうでは、抑そも末である。耳より入れずして目より入れ、口で暗誦させず心で復習させるやうにせねば成らぬ。教育者の宗教的信念が、事物に接する每に發揮して、自づから子弟の心に感應するやうでなくては成らぬ。道德や、宗教の事は、餘り口でしやべると、其の功德を失なうやうである。

◎左なきだに、女性は凝り易きものである。宗派心に拘泥し易き天性の多い方である。左れば、宗派心に流れぬやうに宗教的感化を與へるヿは、特に女學に於て必要なものである。

◎今や、教育をして宗教の外に獨立せしむるヿを立派な事の樣に思ふ人もある。之は、政府の究策で、もと立派なヿではない。教育と宗教とを分離するどころでは無く、是非和合せしめねば成らぬ。殊に女學に於ては、宗教的觀念及び宗教的趣味の開發を廢めては成らぬヿであるが、夫と同時に、學校を寺院會堂もしくは坊守や尼の養成所の樣に心得るヿを全廢し、宗派心に偏せざる博大公平なる宗教觀を養成するやうにせねば成らぬ。

新女大學の評

山下石翁

福澤先生の新女大學は女子の爲に万丈の氣焰を吐き其の鬱屈を伸し其の權利を主張せられたり餘人ならば迚も斯く迄に斷言するとは出來まじ斷言したりとも人は顧みまじと思ふ事を容赦なく喝破して痛快に男子の不心得を叱し無遠慮に女子の利益を主張し乍ら扨て人情のかゆき所ろを忘れず仔細に斟酌して物事の「程」を好くし勘辯辛棒の道を双方に説法して落着よき所ろに納得せしめらるゝ調子は老先生特獨の妙所なり人情の波瀾を渉り世味の甘酸を嘗め而して炎々たる進歩の理想ある人に非んば決して斯くは盡しがたきものと密かに敬服する所なれども扨て隴を得て蜀を望み臺灣を手に入れて尙ほ遼東を惜しむ亦之れ人情免かれがたきとゆへ玆に遠慮なく一言の拙評を呈せんに新女大學は大體に於て惡作なり福澤先生最後最新の筆としては頗ぶる遺憾なきを得ざるの心地す元來大學と云ひ女敎を云ひて婦女子修身日々の鑑となさんには訓戒の穩健ならんとは言ふに及ばず文字も亦た品よくして朝夕の復習に襟を正し自から名香清風に薰せらるゝ心地を起さする樣ならでは妙と言ひがたし苟且にも罵詈惡言の口吻ありて喧嘩腰の説法を聞かせられ只一圖に恭けなく尊奉せんずる敎訓に他を惡し樣に思ふべきとを敎えらるゝは心を殊勝にせんとする者に取て甚はだ嫌に感ずる所ろ也先生が女大學の評論に於て他を罵倒せらるゝは已を得ざるとなり又もし新女大學の爲めに一應辯護し置くと欲せらるゝ條々あらば別に其の解釋を附せらるゝも可なり但だ貝原先生の親切にして醇雅なる敎訓に代えて新たに明治の女大學を作り戸々の女生をして朝夕謹唱せしめんとせらるゝには斯る議論めき喧嘩めきたる敎訓にては頗ぶる當を得ざるに非ずや試みに新女大學を通讀するに何となく書生の説敎を聞く心地し中には壯士の慷慨らしき所もありて福澤先生平生の筆法に似ざる所多し深く疑惑して止まさるなり或は思ふ此の書成らんとする頃ほいには過月先生を苦しめ天下を驚かせたる危篤の病根追々增長し日夜先生の身心に蚕食しつつありしに强根にして勉強なる先生は之を奇しまず强いて之を脱稿せられしもの平氣いらち心穩やかならずして筆頭太はだ荒々しき個處の見ゆるは寧しろ之が爲

めにあらざるが若し然りとせば新女大學は大躰に於て拙作なりと雖とも事情に於て悲しき連想あり其の筆跡の妙ならぬ所に此の文豪の苦痛を見るへく反つて明治の文學界に於ける珍とするに足らん又吾が女學界は福澤先生執筆の最後に於て女權の爲に斯の如き主張絶叫の遺念を與へられたるを感謝して止まざるならん。

亭主の不平

貉軒筆記

●漢の高祖は、泗上の亭主だ。其の不平でも述べるのかと思つたら、宿六としての不平か。氣の利かない話しだが、少しお話し仕ませう。

●一躰、女は可憐なものです。可憐だから愛するのですが、生意氣な事を申したり、拮抗する樣な氣味を少しでも出すと、頭まから粉微塵に壓倒してやらうと云ふ心持が起ります。あとではまた可愛想になるのですが、其の時は不思議にソンナ氣が起るものです。

●内助だの何んのと申しますが、吾輩などには、内助は入らんです。厄介にならん樣にして呉れば、夫で澤山です。ナニ、高が女で、世間を知らんもの丶事です。之によつて吾輩が爲て居る事業に助けて貰はふなどとは決して思はんです。たゞ家の内を奇麗に、樂しくして、身のまわりの世話を能く仕て貰へば、夫で十分です。ダガ、夫では、敎育も入らず學問も入らず見識も入るまい、タヾの女で善からうと言ふでせうが、そうでは無いです。詰らない女がソンナ事を仕て呉れるのは有がたくない。一廉の婦人にして而して斯る些事を忠實にして呉れると思ふのが愉快で、其の愉快で氣が進むのが即わち内助とでも言ふのでせう。亞米利加風の女の世話燒は、眞平御免です。

●昔しから、忠臣が國を亡ぼしたとが度々ある。其の通りで、忠婦貞女に困らせらる丶ことが屢ばあるものです。夫を思ふて呉れるのには相違ないが、其の見識が足りないで、憂ふまじきとに憂ひての心配だから、余計の世話燒で迷惑するとが多くあるものだ。裾を控えての直諫をうるさがつて足で蹴るなど云ふ慘酷な話しもあるが、諫めらる丶方でも元々確信して非常な決心で爲て居るのだから、無理は無いとだ。忠

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は貴むべきだが、愚忠に至ては眞に困る。貞の愚なるものに至ても矢張り同然だ。

●凡そ同情を得たいのは何人も皆な同じことだ。就中、多恨多情の英雄に於ては、幼な兒の如く泣き、婦女子の如く泣くことは毎度の事で、一言の慰藉、一人の同情で、天下を得たのにも倘ほ優るほどに感ずることは固よりある。然し乍ら、國家の大事を機一發の間だに處置してゆくに方つて、誰に語り誰に相談することがあらふ。況んや、わざ〳〵人の同情を得んとて話し聞かせるなどの余暇はないものだ。ダカラ、大事に當つての同情を求めることは無い、相談することも無い、ソンナ事で内助を得やうとも思はない。たゞ信じて、從順にして居て吳れゝば夫で善いのだ。尤とも、其の信ずるのにも見識が入用だから、之が爲めに學問を不用だと言ふの意味では決して無い。學問があつても、見識があつても、默して信じて居て吳れば善いと言ふのだ。出射張られるのが、第一等の禁物だ。

●亞米利加風だの、文明風だのと言つて、人前でカカアの威張るのは實に見られないものだ。アレが文明風と云ふことは有るまい、新開國の雅致の無い時の風だ。女の美と云ふものは、奥床しい所にあるものだ。

●見識があり、器量がある婦人の貞淑温順たるにあらざれば、たゞ無邪氣で、可憐で、美なる奴が、チヨロ〳〵仕乍ら、かぢりついて、一から十迄で、吾が指圖を受けると云ふ方が、妻の名を與へるに適當である。生り半弱に、利巧がつて、内助だの何んのと申す女が第一嫌いである。

●女が理窟をしやべるのは、憶病者が刀を振り廻すやうに見へる。女に助けて貰ふのは、貧乏人に寄附金をして貰ふやうな感じがする。

●先日の「日本人」に、馬場辰猪の墓は、無名の女が建てた。呂泣の墓には、今もつて誰が家の娘だか知れぬ美人が折々花を手向ける、大丈夫死して當に斯の如くなるべし」と書いてあつたが、至極同意で、こんな話をきくと、涙落ち、胸溶ける様な心持がする。定めし此等の婦人は、一見識あつて而して從順ならんことを生命とする女であらふ。

●凡そ、眞とに從順なるものは、甚はだ氣力あるものだ。氣力が無くては從順にはなれぬ。我慢があつて、負惜しみだから、從順になれぬのだ。尤とも、不義、不當な事、權門、利益、虛

飾などに對して從順ならぬのは然るべきヿだが、人品の優れたものに對しては、たゞ信じて從がふべき筈だ。從ふのが即はち強き人の一つの特色だ。苟くも大丈夫たらんものは、妻をして從順せしむる丈けの人品が無ければならぬ。夫は承知だ。夫は、男子の方の覺悟だ。女の方では、男子の人品を見分け、此の人ならばと思つたらば、猫の樣に從がふが宜しい。夫が出來ぬなら、ステてでも、何んでも宜しい、一人ぐらしでもするが宜しい。妻となつて而して我儘を云ふヿは、決して容せぬ。他人は容すか知らぬ、我輩などは決して許さぬ、斷乎たる壓制だ。

◉ダガ子、君、もふ早や壓制力を用いねば成らぬ樣では、お仕舞ひだよ。滿を引いて放たずの工合で、そして可愛がつてやれば、中々從順になるものだよ。夫でもまだ我儘になるなら、ちつと用心し玉へ、何處か弱點を握られて居るので、余程鼻の下に氣を付けんとならんよ。

長夜草堂寂　蕭々風露清
胸襟淡如レ水　獨對古先生

勝 義 邦

隨感

○綠陰獨嘯

譽を好むは虛榮を好むのみにあらず、吾が爲し事を可とする人の同情を得んとするなり。左れど、人の同情の敢果なく賴みなきヿを知れる身には、之れ將た强ひて望ましきものにもあらず。假令ひ吾を賞賛する人の幾何ありとも、就て之に求めんとする事のなき身には、賞賛亦た何の甲斐もなし。よしや天下擧つて吾を罵ればとて、戶を閉ぢ、畠を耕やして、自から食ひ自から讀まんに、抑も何の利害あらんや。假りに門前客の至るヿなからしむるも、淸風の入るヿを妨たげず。案頭音信の書を載するヿなしとも、老莊佛耶の遺經自から存するあり。我何をか貧しきとせん。上下三千年、東西億万里。晝は地表に森羅の章あり、夜は天上に煥乎たる文あり、終生を所學に托して、日新の智樂を收む、豈に事なきを憂へんや。一旦緩急の機あり、俠骨禁じがたく動かば、吾躍つて我力

を献ぜんのみ。人の用ゆると用いざると、何の増減あらんや。胸を叩いて經綸を藏し、策を建てゝ古人に問ふ、理想の馳する所ろ前賢に接し、詩歌の翼を張つて、ミウズの飛ぶ所ろに追ふ。人間の樂しみも亦た大ならずや。

○靜境亦戰ひあり

綠陰獨り嘯ふく時、天地廣ろく、天地亦狹まし。寂然として團扇づかひの暫し止む時、蚊來つて我を刺す。我つく〲と其の裝ほひを視るとき、彼滿腹の血に醉ひ、陶然として樂しみ、轉じて落下す。落下する所ろ、彼が爲めに幾千丈ぞ。下に青き蛙ありき。口を開いて一氣に喫飲了す。彼や頗ぶる滑稽なり、手を蹈る時の如く動かし、足を水泳ぐ時の如く伸し、飄々として飛ぶ。圖らざりき、草陰に大なる引蛙の目を爛々として何ものをか待ちつゝあらんとは。青き蛙は、躍つて其頭上を飛べり。引蛙怫然として怒り、身を起て、口を張り、顔色太はだ悪し。我や興あるとに思ひ、團扇を倒さまにして彼が頭を叩けば、彼いよ〱激し、睥睨して口、泡を吐く。我に向つて其の無禮を詰るものゝ如し。我や亦た頑童なり

○佳人歎きあり

き、いよ〱彼を激せしむるとき、彼不勝不精、かなたに身を轉じ、「馬鹿者は仕方なきものぞ」と言はぬ計りに、大不平のまゝ陣を退けんとす。此時、意はざりき、二三の小蛙、大飛躍、大散亂、疾走し來る。忽まち見る、一蛇の彼を窺ふにてありき。我の悚然として恐怖するに似ず、引蛙は健氣にも能く迎ひ鬪はんとせしが、遂に彼の敵にあらざりき。我乃わち巨石を提さげ來つて蛇尾を壓し、棒を振つて其の頭を碎く。引蛙は、感謝せんともせず、凱旋の躰にて靜々彼方に行く樣の可笑しくも亦た悪らしければ、今一つ棒にて其の背を叩けば、顧りみて再たび怫然として怒る。其顔の醜くさよ。可笑しさよ。

○動中の靜、靜中の動

蟬の聲騒がしき時、草庵の裏、彌よ靜かなり、濤の音高き時、海邊の月、益々寂しきなり。之と反對にて、夕暮の誰れか彼か見分けがたく、鳥悲しく飛び、人、家に歸る頃ろ、吾心騒ぐ。人、寢沈まり、燈火亦消えんとする頃ろ、吾思い甚だしく動く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○佳人歎きあり

佳人歎きあり、朝顔の公けに裝ほふを羨やむ。佳人恨みあり、朝顔の迅速に散るを惜しむ。寧ろ裝ほふとなくして散らざらん歟、或ひは一時の粧裝に厭きて速やかに散らん歟。朝顔、に問へば、露の涙を落す。摘んで接吻すれば、忽まち皺ぼむ。嗚呼、問はん哉、問はん哉、問はん哉、妾が限りなきの憂ひ。涼風、襟に入れども涼しからず、白水、手に掬べども留まらず。樓に倚つて長く望めば、帆影去來常なし。山に對して孤叫べば、只だ吾が聲の反響を聞く。古しえより、人皆な此の憂ひあり、互ひに其の憂ひを語らず。萬代、恨久し、千古、歎斷たず。吁、それ誰と同もに此の胸を割かん。

○識られざる廣き世界

大海の水汲むに盡きず、濱の砂算ふるに堪えず。茫々たる草幾萬莖、一顧せらるゝとなく、榮えて亦枯る。木の葉、繽紛として散り、積んで只だ腐るゝを待つ。亭々たる巨木、天を衝き、欝乎として棟梁たらんとを期す、而して百年斧斤入らず、漸やく蝕はまれ、雨うたれ、倒れ、遂に滅す。仰いで見る、天漢の星、其麗、億のみならず、皆な爛燦として光あり、而して、人其名だに知らず。歴史あつてより此方、記錄精はしからざるにあらず、而も記錄せられたるもの甚だ少なし。其の少なき記錄せられたるものも、記憶せらるゝと極めて稀なり。嗚呼、日の下に新らしきとあり、人之を知らず。風は東より西に、亦旋つて東に反る、人其の道を崇めず。天下一刻も休するなし、人生刹那も止まるなし、而して人悉とく之を覺認するとを得んや。左れば、識られざるものは、識られたるものよりも多きなり、覺えらるゝものは、覺えられざるものよりも多きなり。憐れむべし、塵界の人、狹き劇場に割込み、小さき引札に掲載せられんとして、頗ぶる天與の閑寂を失なふ。思ふべし、君、其の殘生は幾何年ぞ。

○聰明兼ねがたし

家弟、書を寄せて曰く、昨宵、磯邊に獨吟す、雲の色の麗はしきに感歎し、頓かに悟りぬ、雲は是れ海洋を渡る舟子の爲めに、天の與へ玉ふ美なる油畫かと。余れ其風光に羨やみ、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

往て同もに遊ぶ。一夜、海邊に携えて、舟に上り、仰臥して天を見る、空深く、星明るく、皆な吾等を射る。慈眼、腸に泌み、吾眼に徹するの心地す。家弟亦曰く、一夜暗黒、彼の方に於て屢ば電光を觀る、閃々照らす所ろ、悪氣を追ひ拂ひ、難める舟を導びき、望なき水夫に光を與ふるの狀なりきと。余曰はく、汝の感慨頗ぶる可なり、何ぞ其の感慨を樂音によりて歌はんとはせざる。見よ、天上の星、羅列して宿座に在り、各自其の雲氣と磨れ、玆に美妙の音を發す。先哲、心耳に其の音を聞き、天の樂を樂しむ。汝聰明を兼ぬる能はずば、たゞ聰なれ、明を失ふとも亦可ならずやと。時に、波濤はあり、微風もなし、露置き、衣潤ほふ。他に聞く所の人なかりし故に、筆して後の記念とす。

○福音

知人停雲居士、「福音」の說あり。頗ぶる天籟の妙を味はふ。曾て一夜、雨聲涓滴の音を聞きて、其の律呂を覺る。疇昔、岡山公園に鶴の鳴くを聞き、其の母子相呼ぶの語に說あり。近ごろ、日光山に遊び、華嚴、般若、方等の諸瀧に耳を澄ませて、名詮の因緣を覺る。常に曰く、一度び天竺に詣して、山河草木の天籟に聞かざれは、釋尊出現の福音を本覺せんとは難しと。

○奸雄

成敗利鈍を顧みざるは英雄の資なり。但だ、救濟の爲に奮然として起ち、至誠已むを得ざるが故に戰ふ、斯くして成敗利鈍を顧みざるは、眞乎英雄の胸襟とす。之に似て非なるを、奸雄と爲す。彼は事なきに嗟歎し、慨然として起つ、もし鬪かふとなかりせば、日の長きに堪えざる也。所云ゆる芳名を百代に遺すを得ずば、醜を万代に遺さんとするもの即はち是れ也。彼は素と鬪を好む、故に戰ふ。彼は素と事を好む、故に事を起す。豈に奈何んぞ初めより敗成利鈍を顧はんや。如斯き奸雄は、無論高士の是とする所にあらす。左れど、其の佞に優り、俗に優り、平凡に優り、化石せる君子人に優れると亦明けし。奸雄は少なくとも一死あるとを覺悟せり、幾度も怯死するものにあらず。其の断乎として猛然手腕を揮ふ所、太はだ痛快なり、遂に人生の益たらずとせんや。尤とも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

忌はしきは、意氣の悄沈にあり、左右回顧、遲疑停徊して決行の勇なき俗人にあり。水は流るゝを可とす、世は騷ぐを可とす。人世活動なくんば、只だ遂に腐るゝのみ。

○蠻勇

自から歩むものと、人の行きし跡の道筋を記錄するものと、凡そは此の二つあり。自から歩むものは、或ひは能く人の行きし跡方を考ふるとを得ん、たゞ坐して人の行きし道筋を論ずるものや遂に眞悟の機なからんとす。大功名なく、大道常なし。奈何んぞ、生ける仁義に千古同色の紋樣を畫かんや。斷じて之を行ふときは、鬼神も避く 鬼神尙避く、安くんぞ俗骨の只だ囂々たるを容さんや。乃はち稱して蠻勇と云ふ所のものに、反つて眞道義はあり、直ちに刻下眼前の急務に向つて確信の巨腕を揮ふの故也。彼は讀んで知るにあらず、模倣して考ふるにもあらず、直ちに眼前の急務を覺得するが故に、心一無雜、赤誠自から發す。豈に他の容吻を顧みんや。此を以て、其爲す所、破格、時あつてか非倫なるともやあらん。而て人、后に至て漸く其跡に付て說明し、理解し、統計し、記錄す。

雜錄

惡魔の結婚觀

惡魔の子　有美

戀ひといひラヴといへば、天來の福音の如くに聞ゆれど、近頃ふとせることより、惡鬼の靈につかれたる我が眼より觀れば、こは仲々にさるものならず。稍々怖ろしく薄氣味惡るき程のものなれ。同くベルゼブルの子なるかのショウペンハウエルの言ひしことなど、寧ろ我が心を得たるものならんか。人よく云ふ、戀ひとは美はしきことを夢みて、穢きことをなすものなりと。されど、われは思ふ、戀ひとは穢きこと夢みて、美はしきことをなすものなりと。されば、戀の穢きに非ず、戀の終りの穢からんとするなり。戀ひとは聖きものなるを。さらば、その怖ろしといふは、如何ぞや。

世には、戀ひする乙女なるものあり。また戀ひする男なるものあり。婚を結び契りを重ねて、共に住ふに至らば、何程か樂しからめと、ひたすら狂ひ焦がるるなり。迷へる人々よ、

その幾何ならずして、痛みを覺ゆるに氣付かざるか。戀は酒なり、濃き酒なり。戀は人を魔醉せしむるものなり。然り、大なる外科手術を施さんとて、神の人間に飲ましめ給ふ大魔醉藥なり。結婚とは、外科手術にて、こよなく苦しきものなるを、堪え難き痛みを覺ゆるものなるを。されど、世の善男善女は、戀の酒に醉ふてその痛く苦しきを知らざるなり。憐むべき哉、醉へるものは遂に醒めざるべからず。

結婚とは、ロングフエローの語を借るゝにもあらねど、紡ぐことなり、鍋尻の炭を掻くことなり、泣くことなり、而して遂に子を生むことなり。子は重荷なり、妻も重荷なり、夫も又重荷なり。九段坂の上に空車曳きあぐるさへ、容易の骨折りならぬに、五十年にも餘るべき歲月の間、一たび階老の誓いをなせしより、その何れかの死ぬるまで、夫は妻を養はざるべからず、妻は夫に事へざるべからず。而して、共にその子を育だて學ばしめざるべからず。是れ如何の勞苦、如何の痛辛ぞや。厭きたればとて、棄つること能はざるものを。

人誰か好んで難に赴くを敢てせんや。勞苦痛辛の減じて輕からんことは、寸にても毫にても、素より其望むところなり。人の性は横着なるものぞかし。意外に横着なるものぞかし。その汗血を絞るが如きも、實は止むを得ざるに出るのみ。もし結婚なるものの、辛苦を生むこと此くの如く夥しきを觀ば、自ら好んで其禍に入らんとするの馬鹿者、よもこれあるまじ。また人よ、暫く思へ。娶るものなく、生むものなく、紡ぐものなくんば、天道は遂にこの世に絶えんなり。古き物語に、惡魔の、鐘樓に登らんとするや、必ず天使の形ちを取るとかよ。結びの神が、人の子女を婚せしめんとするや、必らず戀の幻を其門に現ぜしむ。あゝ戀は甘きものなり、樂しきものなり。ボルドウの酒の如く、甘く又たのしきものなり。されど、再び言はん、酒は遂に醒めざるべからずと。されば、人の眞心は結婚を希はざるなり、たゞ戀ひの甘酒に惑はされて、よひぼれの如く、大事の契約に、血と肉との印を押すなり。素より其前後は全く不覺なりしと知れ。外科の手術施されたる人は、魔醉劑の力消えうせたる頃、始めて其眼開き、我が脛の切られ、我が骨の痛むを知る。世の淺墓なる乙女子と齢若き男どちよ。戀ひの酒、いま醒めた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ればとて、漫りにホームの荊棘多きに驚く勿れ。その夫その妻の、美はしきところ少きにつぶやく勿れ。われ有美、悪魔の子にして又ベルゼブルの子なるもの、誠とに爾曹に告げん。これ受くべきの酬ひなり。智慧の實を味ひしとて、末の世までも額に汗せよと宣へる荒神は、豈に此る應報を與へざらんや。

エマルソンが言ひけん如く、海は其岸邊に立ちて眺むれば、仲々に美るはしけれど、人あり、若しそのうちに投じて、身を洗ひ水を弄べば、今までの美しさは、何れにか消えゆくなり。結婚とは、岸の邊りに海面の景色ながめし人の、俄に思ひたちて、そのうちに浴み始むるに似たり。故に以爲らく、結婚は海水浴の如しと。すでに海水浴なり、その水の景色の美はしさの、今は見えずなる如く、戀人と嬉ぶ樂みの、今更の如く、相合ふて消ゆるは、いふまでもなく、泳ぎの術といふもの知らずば、水に溺るる危さもあるなり。世の善男善女達よ、心せよ。一たび結婚の門に足ふみ入るれば、忽ちにして戀の酒はさむるなり。今までは、如來の如く拜せられし情郎も、既に夫とすれば、羅漢ほどの難有味もなく、薩菩の如く輝ける戀人は、夜叉の如く怖ろしきものとなるなり。あゝ迷へる乙女と若き男よ、情交の樂み婚筵の悦び、豈に長久に續くべけんや。結びの神が與へます強く濃き魔醉劑に醉はされて、我が身の傷つけられ、重荷背負はさるるを知らざる人の哀れさよ。子は出で子は來り、泣き叫けび倒れ顚がり、パンをもとめ水を呼び、女は炊しき汗し紡ぎ織らざるべからず。而して男は夢み飛び走り醉ひ歌ふこと能はざるなり。あゝ方便の慈悲に富み給ふ結びの神は、なさけあるものなる哉。

泳ぎの術とは、夫始めに先づ妻を抑へて、時々飴を與へ、稀に苦き面を作ることなり。泳ぎの術とは、妻始めに先づ夫を迎へて、色を含り聲を巧にし、唯々諾々、これ命これ隨ひ、時折すねることとなり、づれることとなり。家庭の波亂は、情の溺死なるを知らずや。

あゝ女の腹より出でゝ塵に復へるものよ。われ悪魔の子にしてベルゼブルの子なるもの、再び爾曹に告げん。爾曹は、穢きことを夢みて、美はしきものをなすものなり。影を見て、形ちとなすものなり。されど、新らしき歌と悦ばしき調べとをあげて、恵ある神に感謝せよ。彼れは古き酒の醒めし頃に

は、また新らしく酔はせ給へば。人、戀の酒にさむれば、又た異なる酒に酔はされて、生み紡ぎ播き刈るなり。あゝ悲しき哉、人は餌の香ばしきに釣られて、自から罠にいる鼠の如し。

いかづち物語

（完結）

久保ぬの吉

西暦紀元前六百年に於て、歐州にテールスありき。彼はよく琥珀と絹とを摩して電氣をおこす事を知れりき。此時は吾神武帝の御代、支那の周の代なり。拾六世紀にいたりてエリサベス女王の侍醫ギルバート氏は琥珀と絹とにかぎらず、何物をすりあはするも、電氣を發すべき事を明言せり。されど未た雷神として天上におはせるものと、同一なりや否やはしられざりき。おもひきや、十二徳を以ておのれの題目とせし君子人フランクリンによりて、此連鎖の結ばれむとは。年は千七百五十二年、月は六月、所はフィラデルフィヤの近傍に於て、七雷神は氏の紙鳶糸によりて此世に下り、永劫不動の約定をとゝのへ行けり。氏は此成功を見し時涙を禁する能はざりきといふ。(So great that he could not refrain tears) の記あり。

十八世紀十九世紀に於て Galvani 出て、Volta 出て、電流は動物躰の内にも存在する事を明示し、電神の發明に及べり。その後電氣の研究は、各國の學者間にもてはやされ、英に Sir. W. タムソン、ファラデー、マクスウェルあり。佛にアンペール、デユーボアレモン。獨に、オーム、ヘルムホールツ、レーントゲン等あり。米に、テスラ、エヂソン氏等あり。各學理に、實地に、不朽の功蹟を有す。近代に於てエヂソン氏は神の力を一層現實世界に密着せしめたり。「雁の使をえてしがな」といひき、鴻雁に思ひをよせて泣きしはいつの時代ぞ。瞬時に書を送るべき電信あり、否大西洋萬里の波濤を隔てゝ彼岸、此岸にあり、電話を以て結婚式をあげたりといふ奇談のおこりしも今の時ならずや。「うれしくも無しますかゝみ戀しきの人のかけをとめねば」とて吉野の雪中に泣きしは誰ぞ。今はしからず。中々に形見となるを悔ゆる迄、あやしきうつしゑとうつるにあらずや。まして、電氣の力をもて活動寫眞となさんには、時を動作をも目撃すべし。若完全

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なるいろどり寫眞の發見ありて、蓄音器の改良出來べくば吾人は子々孫々に今の世の中、そのまゝを傳ふる事をもえむ。吾人は又電氣の力をもて、山をもくづすべし、海をもほすべし。光をも待べし。熱をもうべし。

あはれ、神の手綱をたよりて生命をつなぎけむ神代の人々を呼びおこし、此等のありさまを一瞥せしめむには、彼等何とかいはむ。神の手綱より引きはなされて紡績の如く回轉する焦土たゞずむものと罵るべしや、嘲けるべしや。

必らず／＼、彼等は今の世に生れざりしを悔ゆならむ。彼等は實に神の調理に甘んじたりし小兒なりき。吾等は神の調理法を會得して自からの味を自から作る活物也、大人也。おもへば神は我々を捨て去りしにあらずして一端よりかつらの糸を傳はりて吾人の手中にやどれりし也。

望は后にあらずして前にあり。吾人は退ぞく事を要せず、唯すゝむべし。曉露全たくはれて一條の坦道あらはれむとす。神は實に無邊に、無究に、到達せる一條の道をのこしおけり。その道を求め、その道をふむべきは人の務めならずや。予は詩的の未來を期し、理想の世界を信じて疑がはず。夢よりさめたる人の如く、迷ひより脱せし人の如く、覺をえむとす。眞如を抱かんとす。もしそれ即身即佛の境に到達して現世を見る事をえんにはいつれか詩的ならざる、いづれか理想ならざる。予は遠く西方に向かはずして樂土をうべしとおもひ、夢ならずしてユートピアに遊びうべしとおもふや。さはれ

誠者天之道而誠之者人之道也

明治卅一年十二月廿五日　クリスマスの紀念に徹夜して誌す、　ゐの吉

文書く時

靜澗

文作りて父兄に賞されんとを望み勵むの時は、子供の小學時代なるべし、而かも何時までも賞賛を受けて喜ばぬ人はなきが如し。雜誌等は揭けられんとを欲して書く時あり、少年の時代なるべし。雜誌に始めて出てたる時は、いとも樂しく思ふ時なり、金の欲しさに書者あり、則ち原稿料を得んとするなり、今日の詩人小說家乃至新聞記者及雜誌の掛持記者大概は之れなり。需めに應じ止むを得ず書く時あり、止むを得ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

書く時は呵成せざるは勿論、筆殆んど澁滯して進まざるものなり。面白くして書く時あり、此時や如何なる騷々しき事四邊にあるも耳目に入らず、心は靜定一方に傾向す、文を綴るに最もよし。終日思案し何を書くべきやと煩悶の極、夜に入りて筆を取るヿあり、恰も難產の如し。人と對話する中に主題の妙なるを見出すヿあり、又步行の際、妙想を得るあり。題目多きに過ぎて何れも面白しと思ふ時は、內包淺くして外延廣きなり、故に愈々之を書かんとするに當りて、何れも陳腐たるを感ずるヿあり、數多の內を沙汰して其一を撰擇する時は、其數多ある題目の思想の幾分つゝは、其一に連想せらるゝヿあり、又全く別方面に向ふヿあり。文書く時につけたる僻は他と仝しく容易く除かれざるもの、靜閑の部屋にて屛居書慣るれば靜閑ならざれば能はざるに至り、喧囂たるを厭はず之に慣るれば喧囂ならざる處は却て不便の感あり、之と仝じく書く時に飲食、正坐跪坐對坐等、漸次厭となり、之れありて興訪ひ來り、之れなくして興來らさるを常とするに至るが如し。一氣呵成一字も添消せさる時あらば、始め一二行宛を幾度も書き損する時あり、後者の場合は未た興の來らず腹案ならざる時なり。調査風の書き方を長うすれば、議論風に描くして殆んど見るべからず。

或者は怒りつゝ書く者あり、怒らざれば彼れの筆進まざるなり、或者は戒むる覺悟にて其人を目前に在るか如くして、其欠點短所を書く者あり、之を普通に及ぼす時は人情を穿ちたりと認めらるゝも時に或は忌まるゝヿあり、或者は誹りつゝ若しくは嘲りつゝ書くあり、兎に角事柄を眼前に彷彿せしめて書くは常なるべし。

職業として書くは觚操者たり、書かされば衣食されさるなり書かさるを得ずして書くものは、職業的と必要的とあり、其必要的なるは眞に感ずるか入用あるか止むを得さるかの別あり、出版するか爲めに書くか如き心地する時代は、雜誌衰弱の時なるべく、書くか爲めに出版するは雜誌創設の時なり、隆んに主義、意見を發表せんとするより書くは面白く、金を得又は謝禮を目的として書くも亦一種の味あらんも、其書時の間は神聖にして邪氣なきを常とす、即ち作文刹那の精神は全く文にありて全く錢又は名譽等の欲によらず、其刹那は慥かに佛心なり。眞面目なり、詩神の前にあるなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

拾ひ紙

翠

かたしく　夜はうの花の
　うへよりあけて有明の
月のけしきに　さそはれつ
　庭のをちこちさまよへば
筆のあとある　紙一片
　學びの　子等がすさびかと
何心なく　とりあげて
　見ればあやしや　歌一つ」
『山子規うちはぶき
　雲井をわたる　一聲に
あこがれいでし　十六夜の
　月すみわたる　山の奥
峰の嵐か　松風か
　さだかにそれと　わかねども
いとも妙なる　ひゞきこそ
　ふえ竹の　音と知られけれ
何處の人か　なつかしや
　同じ心に　奥深く
迷ひ入りしか　さるにても
　かたらひがたき　處女の身
さりとも近く　忍びより
　その　調だにきかばやと
聲をしるべに　はけいれば
　火影かすかに　見えにけり
いやゆかしうて　近よれば
　誰か　世を忍ぶ　庵ならむ

松の柱に　かやが軒
　さながら月を　友として
ぬしは　誰とも　白妙に
　さき亂れたる　うの花の
あるじがほなる　柴の戸を
　たゝくくひなのうらめしさ
軒端をわたる　松風に
　うき世の雲は　たちはなれ
庭のやり水　音すみて
　眞如の月の　影きよし
かゝる深山に　とゞまらば
　ふち瀬とかはる　世の人の
うすき情を　たのむより
　身はやす川に　流れなむ
曇らぬ　峰の月影に
　心のくまも　うちあけて
蓬が下の　黑髮を
　松のあらしに　けづらせて
心のまゝに　すまばやと
　思ひ入りては　なかなかに
窓にさし入る　月ねたく
　やり水うらむ　わがこゝろ
折しも月の　影きえて
　闇のすきまを　もりくるは
笛の音ならで　ほとゝぎす
　のきばかすめて　返るなり」
あはれたえなる　筆のあと
　あはれやさしき夢がたり

訪ひこし　人のおとせしか
　はた　夜嵐の送りしか
そめにし人の　なつかしや
　われも一夜の　ゆめがきて
みせまほしさは　おもへども
　みすべき人の　わかぬなり
夏かはなれし　やり水の
　あたりさまよふ　衣手に
松の下風　ふきそめて
　夕日のかげの　すゞしさよ
まつまほどなく　あしびきの
　山よりいづる　月の影
空には雲のあともなし
　心さへこそ　すみわたれ
まどうちあけて　月影を
　友に文よむ　折しもあれ
あしだの音も　ゆるやかに
　とも人つれて　こし少女
あやしや　軒に　近よりて
　此方の笛の音にうかれ
迷ひ入りにし　此の深山
　歸らん道を　しらせてと
はづかはしげに　問ふ言葉
　此方に笛の音も　せぬを
心ゆかれぬ一言と
　見返へす　今朝の拾ひ紙

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

病床に夢む四の處女　藤本露草

●はな子

生れながらの黒髪は
花の姿を裝ひて
やさしき白き掌は
くれなゐ匂ふ唇に
物言ふ術を恥かしく
つゝむ心の幼けなさ
問へば首を打ちふせて
何を語るか迷ふ身の
かへす答に急ぎつゝ
兩手を胸におしあてゝ
亂れ調に答へけり
『鶯の花に歌へる新調こそ
春の來りしゝるしなりけれ』

●よう子

かたく結べる其口は
念佛の聲に絶間なく
かたく保てる掌は
遠き彼世を祈りして
日夜二人の孤兒を
育つる術のさびしさよ
問へば裝をつくろひて
やさしき指ををり數へ
月日の經るを何となく
憂ふ姿ぞしづしづと
よわき聲調に答へけり
『うたゝねの枕に問ひし郭公
なごりをしげに聞えける哉』

●しづ子

草に生れて草に死ぬ
虫が命にさも似たる
我身が如き望みなき
はかなき影の香ばせは
早き月日もつく〴〵と
涙ながらにくらしけり
問へば答へぬ風情にて
首を下げつ靜づしづと
兩手をひざにおき重ね
いともかよわき聲調にて
たゞ一言辭答へけり
『草むらに鳴ける鈴虫蛬
露を命とたのむはかなさ』

●なみ子

髪は亂れて恐怖しく
眼瞳しづみて光りなき
戀か嫉妬か恨む身の
はかなき露に染められて
狂へる様の處女こそ
今日を限りとなやみけれ
問へばひとみを運かして
ふるへる聲に唇を
いとも烈しく切歯つゝ
片腕つよく襟を持て
狂へる様に答へけり
『荒磯の岩もくだけん波上を
靜にとべる夕千鳥哉』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新刊書

聖教新論

曩に「鳴皷録」を著はしたる本川惟敬氏、亦た、「聖教新論」一册を公けにし、「基督の問答」、「聖靈」の二章を說く。中に、左の如き句あり、

もし善く親しく自己本來の十字架に參ずるものあれば、其人は自然、贖罪の道理會得、疑あるまじく候。

我等は舊約及四福音傳を百讀又千讀し、玆に聖靈を求めて息まざれば、終に感發の朝あらんと、基督の約束なれば、ゆめ〳〵疑ふべからず。保羅さいへども其初、彼を嗣ぎしにあらず、約翰を學びしにあらず、一朝機緣の熟するありて、心地明了、復た地なきに至りしのみ。

凡そ、此邊の消息は、東西宗教を併せ修め、靈覺の正眼を究めんとに苦心せしものなられば、大抵は發明するを難きもの也。此書の著者の如き、當今教海波瀾の進路に於て、確かに一道の白波を揚ぐるもの歟。（如雲）

『平八茶屋』と『北向地藏』

新小說第八卷に出で、初は二十三階堂、後は山下雨花、作す。廿三階堂は、男女間想思の情に就ての一觀察を施こし、妙に情致機轉の消息を穿ち、極めて面白き題目に入り乍ら、今一步逹かざる所あり、殊に其結末に於て、棹尾の力を見き、全篇反つて俗殺せらるの憾ありる。山下雨花氏は、稚情の一邊を寫し、多少愛らしき眞實の文風も見ゆれど、何となく引立す、蓋し天禀の才ありて未だ磨せざるの筆、確かに優處ありさいへど、今は惜しむべき節多し」。此の二篇ともに、特更ら首尾斷續を晦まし、わざとらしき朦朧躰に陷いれて、敢て讀者の好奇心を惹かんとす。讀者を悶殺せしめずして、反て失望せしめんとするは、豈に遺憾ならずや、（露草軒）

文藝倶樂部第九篇

水蔭氏の『船長の妻』左程にもなく、岡野紫水氏の『米屋町俠客逢引』は、あまりの作と思はるる中にも、『娘義太夫晝夜錄』と題する「曉鷄戌」氏の雜錄は、巧みにも寫せしもの哉、此筆をもて小說をものされたらば、いかに。

大日本寫眞協會品評會傑作

七月二十日の「太陽」に附したる傑作寫眞の鉛版は、さすがに斯道品評の撰拔せしものに據りたればや、近來余り見ざざる出來なり。寫眞と云ひ、鉛版と云ひ、斯迄進みたれば、些か人意を强くするに足らん。

審美綱領　上下二卷

森林太郎
大村西崖　編

我が學界に於て美學の聲を聞くと久しからざるに非ず、而かも紛々の論議文壇に喧びしくなりしは、森鷗外氏が「しがらみ草紙」を刊行して爰に談記を始めたると、「早稻田文學」の紙上、大西祝君を始め二三文士の美學論を試みたると、外に忍月等の論文等に始まれり「哲學雜誌」上の二三の紹介論文と、又早稻田專門學校慶應義塾外一二の講義とを除けば、未だ見るべきものあらざりし、中に兆民氏譯の維氏美學の外は成本したる著作もなく、多少美學論の伴ひ來りしも多くは文學論に連れたるにて其詩美の一部分のみ議せられしと云つて可なり、繪畫も近年多少の美學的なる論あるも多くは見るに足らず。されば我邦美學の位地たる其聲の高き割合に一般普及の上より見れば、淺薄にして幼稚なると言ふまでもなし、此際斯學に堪能なる森氏等の著書を見るは學界の爲め大に慶賀せざるべからず。頃日我机上に審美綱領二卷を見る、取りて一讀するに之れ編者等の云へる如く、ハルトマンが「美の哲學」より義を取りて編述せるものにして原著の百分の一だにも及ばざる字數なり、四號話字百十五枚の小册子、之を原著に見るに細字八百三十餘頁あり、今此大册子を僅に百十餘枚に縮少す。飜譯に非ず抄譯に非ずして唯其義を取れるを明かなり。

此書の性質斯の如し、故に若し此原著を飜讀せるものにして之を教授上の目錄手

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

控さして生徒に與へ、一枚若しくは一題目に付き講話を試むるの資に供せば、便宜此上なし。若し夫れ此書のみに頼りて原本を知らざれば、言簡にして意義深く幼學者には多少解し難きものあらん。

譯語は通例の用語より改まれるもの多く、少しく不便なるも概して正確なるは云ふまでもなし、之に慣るれば毫も妨けなからん。兎に角、簡略に過ぎたるを以て初學者には聊か解し難き節あり、否な奥妙の深理に到達せしむるを難しさするも、美學の要領を知るには當今、此書を外にして求め得ざる時節なれば、有志者就て一讀して可なり。論議する所說に至りてはハルトマン其人の批評に渉るの要あり今一々之を識するの遑なし、何れかさ云へば余はハ氏の原著を坐右に具へて平生之を愛讀し之を重んじ、編者さ均しく其所說を紹介する側にあれば、寧ろ他派の批評こそ望ましけれ。

最後に一言すべきは此書の如く大册を縮少して能く短簡の文字に大要を記するは、飜譯より遙かに困難なれども、其此に出でしは編者等の凡手に非るを證して餘りあり。唯骨格のみ並列せられし如く、之を幼學者に試讀せしめて解する者少なきは多少の憾みなり。發行所は日本橋通三丁目春陽堂實價六十錢(靜淵)

日本商業史　全　横井時冬著

日本商業史は、横井時冬氏の著にして太古より明治時代に至る一千有餘年間の商業史なり、五篇五十三章に別ち三百四十餘頁の册子、附するに今古の行商、商店等の繪畵を以てす。著者は篤學の士にして其所說の信すべきは今更言を要せざる所、三上參次君の曾て此書の試刷に題せるもの實に眞情を得たるものあり、曰く

學士横井時冬君博學洽聞にして性また堅忍特に考證に得意なり曩に公にせられし不動產沿革史園藝考など皆學者間の好評を博し諸種の雜誌の上にあらはれたるものはた予輩の感服するもの多こ近ろまた帝國商業史を著し其試刷を寄せられたり取り敢へず一讀して先づその坐右必備のものなるを喜び從當に參考に資していよ〳〵其好著なるを確めぬ

さ。其引證する所の書、數百卷、材料豐富にして該博且つ其精確なる横井氏の如き博學堅忍の士に非されば到底爲し得さる者あり、世間尋常の書さ同一視せず、我商業の變遷を知らんさするもの必す之を讀むべし。我商業史の最も完備せるもの此書を外にして他に求むべからざるなり、發行所日本橋區本町金港堂定價一圓二十錢(東根)

西洋哲學史　蟹江義丸著

上下三千歲の哲學史を僅かに三百餘頁の小册に記す、其不充分なるは言はずして明かなり、古代希臘哲學より近世ヘーゲルに至るまで其所說の大要、著書、傳記等の一斑を記せり。西洋哲學史上には如何なる人名ありや、大躰如何なる說ありしか、此書によりて知るとを得べし、初學者就て見るも可なり博文館帝國百科全書中の第卅二篇、定價三十五錢(潮陽)

當世活人畫　儘世翁著

人物には表裏大に懸隔するあれば、公私共に大差なきもありさ雖も、眞相を知らんさせば、必す兩面を觀察する要あり、公人さして知るさ同時に家庭に於ける私的の生涯を描くは一種世人の好奇心に投するのみならず、其傳記の眞相を悟らしむる便あり。這般の消息は特に世人の知るを欲する所、著者又此に見るものなり、本篇收むる所、之を名士にしては伊藤、樺山、福澤、川上、星、山本、伊東、井上の諸氏あり之を閨秀にしては伊藤侯夫人、井上伯夫人、星、下田、跡見女史等あり、其平生の嗜好、經歷、素姓等を記して頗る面白し、無邪氣なる山出しの書生之を讀んで曰く、今の大臣なごの奥さんには、藝娼妓なごあるそうですさ。此書收むる所未た少なきも、世は此の如き內幕を知るに急なるの勢ひあるか如し、其傾向の是非は今且らく之を問はず、名士さ閨秀の裏面聊か之によりて傳へられん、發行所日本橋通三丁目春陽堂定價三十錢(希聲)

片々

◉教育に宗教を入るゝの害　井上哲次郞氏、「教育時論」(八月十五日分)に寄書して曰く、宗教を教育界に入るゝの弊少しとせざるも、其の重大なるものは、左の三種と。曰く、

宗教は必らず迷信を帶びて來り、智育の發達を沮礙す。

宗教は我邦に特異なる國民の性情と相容れざるものなり。

宗教は教育界をして各派の爭鬪塲となさしむ。

嗚呼、井上氏たるもの、いつ迄、同じ杞憂を懐かるゝにや。

◉中江藤樹先生　前項とは雲泥にて、「教育報知」が、井上哲次郞氏講演の一節として記載する「中江藤樹の道德及修德の工夫」なるものは、左の如し、

藤樹は良智を明め、上帝に合一するを以て道德の根本とす此の境界に達せんには、自反獨愼の工夫によるなり、元來萬人皆良智を具ふるを以て、自反獨愼の工夫を積みて良智を明らむれば、何人も自己胸中に於て上帝を發見すべく、益之を擴充すれば、天地間に充滿するに至り、非常の勇氣を得べし。是れ即ち浩然の氣なり、上帝に合一して、聖人の境に達したるなり。然るに凡人は惑により良智を妨ぐ、而して惑は慾より起る故に慾を捨て、惑を打破するを以て、學問の正路に入る關門となす、斯くて心路につきて良智を取り逃がさぬ樣にせんには、無慾に歸するにあり、故に無慾は學問の極意なり、善をなすも無意識にて行ふに至らざれば、未た極度に達したる者にあらずとなす。然らば上帝は何によりて認むるを得るかといふに、太靈即上帝の實體なりとす、方寸の良智も、靈心にして慾念なきにあり苟も慾念あらば、良智は忽ち去るべし。陽明旣に太靈を說きし事ありしが、藤樹は尙進んで方寸の靈と、太靈即上帝と同一なりと說き、縱横に說破して、太靈寥廓は吾人の本體なりといへり、又上帝は人間の行爲を悉く照覽し給ひ、善惡に報ゆるに禍福を以てし、毫も差ふ事なし。故に畏れて愼まざるべからず、人たらん者は、慾を去り、良智を明め、恭敬を盡して上帝の御心に從はざるべからずとなす。此點も亦基督教の神の考に異らず。(六月十四日教育報知)

◉明惠上人最后の事實　奈良東大寺寶庫に秘藏する此の文を寫して、此頃ろ「十善法窟」(第百十三輯、八月十五日分)に揭載せり。上人臨終の遺訓なり。中に云く、我身ながらへて久しくあらば、還て諸人の謗を増すべし。いふ所の法門は一々に人に似ず。佛說は、三科蘊處界の法門も、人我無生の理を顯はして、凡夫の我執を翻ぜむが爲め也。然れども、之を習ふ輩、ます〳〵我見を増長す。大乘無相不生の妙理、五法三性の法門、眞言の本初不生、阿字門の密行、本尊の瑜伽、いたづらに名相妄想の塵にうづもれ、空しく名利のなさろにかくれたり。聞く所、佛法をさへづるに似たれども、併ながら邊に住し、邪にとゞまつて、正惠の門戶開ける語を聞かず。之を破して捨てしめば名字の教法なを皆な絕えぬべし、之に依止して尋れんとすれば、佛道の直路すべて入門を失へり。佛道入りがたく、智識あひがたしといふ事、まことなるかな、悲しむべし、悲しむべし。

古より、逹人の慧語皆な然かなり、東西万古一轍に歸す。

◉トルストイ伯の聖書讀法　凡て明瞭なる箇處は即ち要點なり。聖書の重要なる章句は、各人必ず一致すべし。反言すれば、凡ての人が悉く明瞭に解釋する箇所あるべく、而して其章句こそ最も重大なる金言にして實に基督の教の骨髓を成すもの也。凡そ人、わが人に告げんと欲する要點は、之を解し易く說述す、況んやキリストに於てをや、彼は必らず明晰に其要點を告げたると必せりと。(「太陽」八月廿日分)

◉大望ある婦人　は斷じて其愛を男子に注ぐ勿れ、必ず獨立寒居以て生涯を送るの覺悟を要す、然らずんば彼女は多く不貞操の女と化し、遂に失望の底に淚を友とせざる可らざるに到るべし、婦人は到底情に脆き者なり、大望は大望として戀に失敗せば爲に失望す。非常なる希望を有する婦人は終生を共にする男子を見出さず、唯自身の助言者、朋友たるの男子を多く有するに止まらしめよ、左らば彼女は愈々發達に發達を重ねて、或は其大望を成就せしむる時あらん、古來、賢婦にして素行修まらざるもの少なからざるは、即ち彼等が一の男子に久しく滿足するを得ざるに起因せるもの也(世界の日本、八月十九日分)

◉一夫一婦　我皇室には古より「無二妻」の主義行はれ居れり。反つて、基督教には、其經典又は教理に於て、果して何處にか一夫一婦を天理とし教本とはなしたる。大槻如電氏が基督教は一夫一婦を主唱する故に國躰に反せりとは、同もに誤謬なり(社會、八月十二日分)

◉夫婦いたちこつこ　の消息を、時事新報は其社說「男子たるもの大に注意すべし」の文に於て漏して曰く、本來細君の志決して小ならず、内外の男子を手なづけて全く已の腹心たらしむるときは如何なる秘密も其輩の計ひにて容易に行はるゝが故に夫は細君を無二の貞婦と心得て大滿足なる其一方に細君は巧みに夫の目を掠めて勝手氣儘の振舞を演ずるの奇觀を呈するに至るべし。もしも男子輩にして從來の儘に安んじて妾を勸むるは細君の義務なりなど心得、漠然經過する時は案外の邊より奇禍を發して一生の面目を失ひ併て一家の破滅を招くこともあるべし。

◉解放自由に伴ふべき熱誠　報知記者曰く、問ひたきは今の婦人問題を絕叫す

る婦人諸氏の覺悟なり、想ふに是れ古今解放（エマンシペーション）問題中の最さも大なるものに屬す、之を解釋せんさする諸氏は果して前世紀以來の解放自由運動者の如く精力を盡し財産を盡し名譽を抛うち將た身命を抛つの心あるか、ロングフエロー謳つて曰く、高尙なる人の胸中には神聖なる狂亂心ありさ、然るに、其賴める先進には俗氣滿腹の一老儒あるのみ、運動者人を得たりさ云ふべからず、狂氣尙は避くべからず況んや生意氣をや、而して或は生意氣なりさの誹りを聞きて趦趄逡巡す、誠氣中に滿てりさ云ふべからざる也。

時　報

◉華族女學校の大學部　來る九月より新設し、先づ文學部を設かる。學期は三年のよし。追々、女學の高等に趣むくは祝すべきことなり。

◉京都看病婦學校、及京都產院　同志社の京都看病婦學校は、內務省衛生局長より特に紹介ありしさて、近頃各地より看病婦講師及看病婦取締の派遣を委賴するもの太はだ多き由。又今回新に「京都產院」を附屬さし、貧困なる姙婦をして安全に分娩せしむる設備のよし。

◉下田歌子松本荻江兩女史　女學伸張さ其の女學校贊助員募集遊說の爲め。二女史富つて信越二州に入る。盛んなりさ云ふべし。

◉鈴木とう女　神奈川縣葉山村字堀內の鈴木とう女は一漁夫の妻なるが十數年よく病夫を助けたる貞誠四方を感動せしめたり、よつて去十六日同村にて其の德行旌表式を施行せり。

◉婦人共立育兒會　橫濱の大火にて子供の疾病にかゝり、兩親の途方に暮れ居るもの多からんさて、同會より救護施療に着手せり。

◉遊廓の淑婦會　大坂牧方町の遊廓に、淑婦會さ云ふを設け女教師を聘して、修身、美術其他を教授するよしなるが、嗚呼、修身さ淑德、如何に汝の名に於て多くの惡が爲さるゝよ。

◉非接吻俱樂部　英國に於て設立せらる。然るに、我國に於て反つて稍や流行せんさす。

◉洋裝　仙台の河北新報は報す、甲子樓の娼妓は、去十一日の星祭を機さし、一同洋裝に改ためたり、又仙台女學校にては、過般生徒一同をして必らず袴を穿たしむることゝせりさ。嗚呼新らしき事の行はれんさするや、必らず同時に他の汚物によつて穢さる。

◉万國婦人大會　去七月初旬ロンドンに開かれし同大會には、會員百二十五万人の代表者あり、萬國平和の事、女子參政權の事、家庭に於ける婦女の報酬、衣服等に關し會議あり。然し乍ら、會長アベルヂーン伯爵夫人は、くれ〴〵も女子の本領の家庭にあることを演說して、女ばかり一大集會を催ふするの永久の强迫がましき弊に陷いるまじきことを注意せんさて演說せり。

◉高橋ツ子エ　に對して左の如き賞狀あり、

宮城縣登米郡吉田村高橋千代吉姉　高橋ツ子エ

平素孝貞の志厚く舅姑の長病に侍し看護承歡到らざるなく殊に夫の肺患に罹るや藥餌養生を盡すさ雖も克く艱難に堪へ織手家計を支持し益々舅姑を慰藉し專心孝養を怠らざるを茲に十一年志操一日の如し洵に奇特さす依て其爲賞金三圓下賜候事

卅二年八月十二日　　宮城縣知事　千頭淸臣

要目一覽

何人の罪ぞ（社會雜觀、其一）　世界之日本（八月十九日分）
大望ある婦人　同前
一夫一婦さ國躰及民俗　社會（八月十二日分）
求婚錄（春秋女史）　北海道每日新聞（八月連載）
男子たるもの大に注意すべし（社說）　時事新報（八月十四日）
米國の槇田のぶ（同前）　時事新報（八月十六日）
夫人の素顏　報知新聞
谷子爵夫人くま子（完結）山本權兵衛夫人さき子
（令孃鑑）　千代田日報
（久世貞子）
女尊男卑の眞相　京華日報
男女ヽ密會所（七）離婚の裁判（八）
側面より見たる眞家　萬朝報（連載）
解放さ自由　報知新聞（八月二十日）
氣焰錄　日本（八月十八日）
萬國婦人大會に就てタイムスの說　國民新聞（八月十九日英文欄）
兒童學（オスカー、クリスマン）　教育實驗界（第四卷第三號附錄）
諸人種の子供に關する風習（坪井正五郞）　同前
女子遊戲法（信號暗算遊戲、並、圖）　同前
奥村五百子傳　政教時報（第十五號）

女學雜誌社出版書目
故若松賤子女史

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女子の友
臨時增刊

玉くしげ

(七月卅日發行)

口繪寫眞十六葉●紙數二百頁●定價金廿錢

朝來風なく氣蒸して、暑のうつるを遲く、欠伸既に十たびを超ゆるも、日は未だ亭午を過ぎず。立つて楊が拂うて緑蔭に移すも、赤帝威猛にして魚ならねども釜中に坐する思ひあり。斯の如きを日を運れて九夏に亘り、人は將に悶殺また倦殺せられむとす。「此時吾人奈何ぞ袖手して諸媛が焙熱を傍看するに忍びんや。宜しく一服の清涼劑を調して、諸媛の座右に呈すべきは、常に吾人が諸媛に盡すべきの義務なるを信す。是に於て本誌一週年の祝意を兼ね、茲に高雅清韵なる大々的臨時增刊を發行し、以て、年來諸媛に負ふ所の眷顧に酬いむとす。若夫、諸媛、苦熱やるなきの時、把りて之を楊下に誦せば、風なくして清爽頓に起り、躬は羽化して雪山氷窟に入るの感あるべし。其効豈啻、一服の清涼劑のみに止まらむや。諸媛が銷夏消閑の料、これを措いて、はた有らじとぞ思ふ。

◉卷首寫眞版

○第九回婦人慈善會總會寫眞(有栖川宮大御息所殿下を始め貴婦數十名殿下御書) 十六枚
○閑院宮御息所(智惠子) 一枚
○税所敦子女史、下田歌子女史、加藤錦子女史、幸田延子女史、鶴久子女史、中島歌子女史、跡見花蹊女史、三輪田眞佐子女史、三宅花圃女史、跡見玉枝女史、梶田薄氷女史、肖像 一枚
○女子高等師範學校、東京音樂學校、東京女學館、跡見女學校、職員生徒寫眞 三枚
○野口小蘋、跡見玉枝兩女史畫 四枚
○華族女學校生徒、黑田侯爵令妹祐子、大隈伯爵令孃光子、野村子爵令孃末子書 二枚
○女子高等師範學校附屬高等女學校生徒高橋八重子畫 一枚
○東京女學館生徒、糸川はつ子、野澤斧柄子畫 一枚
○跡見女學校生徒、三條公爵令孃夏子、齊藤松野子畫 一枚
○共立女子職業學校生徒、武藤梅子寫生畫 一枚

◉記事(數件)

發行所 東京本郷元町一丁目二番地 東洋社

女學雜誌社出版書目

- (再版) 海舟餘波 巖本善治著 正價金三十錢 郵税金四錢
- 吾黨の女子教育 巖本善治著 正價金二十錢 郵税金二錢
- 公娼可滅 島田三郎、植木枝盛二君合著 正價金三十錢 郵税金三錢
- 廢娼演說 櫻井成明君譯 正價金二錢 郵税金二錢
- 腓立比物語 橫山雅男君著 正價金二十八錢 郵税金六錢
- 婚姻論 若松賤子君譯 正價金十二錢 郵税金四錢
- (再版) 小公子 故若松賤子英文集 正價金三十五錢 郵税金八錢
- (英文) 巖本嘉志子 正價金六十錢 郵税金六錢
- 俳諧史傳 布川靜淵、故小此木秀野君合著 正價金二十七錢 郵税金四錢

月刊雜誌

無絃之響

《九月一日第貳集發行》《第一集賣切》

內國無郵稅每月一回一日發行
壹册定價前金三錢
半年分定價拾八錢
一ヶ年分三十五錢

無絃之響、其名奇なりと雖ども、志ある同人相集りて美學文學に關する私説を吐き、聊か世に傳へて同情者の愛讀を乞はんとするものなり。されば敢て鉛版を用ひず、又發行部數の多きを企てずと雖ども、自ら稚氣熱情の籠たるものありて讀者胸底の絃線を共鳴せんは、素より斷じて疑はざる所なり。幸に購讀の榮を與へよ、

發行所 巣鴨村庚申塚 露草會

故若松賤子女史譯述

再版

小公子

全一册洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるると數十百回、一代の流行を左右して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作人を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らす、婦女老人亦讀まざる可らす。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刋行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館
大賣捌 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY